
魔法先生ネギま！

二つの顔は誰の為？

黒薔薇 = 神羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！　－一つの顔は誰の為？

【NNコード】

N8723W

【作者名】

黒薔薇＝神羅

【あらすじ】

兄さん！ そう言いながらネギが後ろを追いかけて来る・・・
でもな、ネギ・・・俺は

ネギの兄として転生した主人公
時を超えて一つの顔を手に入れます
さて、その一つの顔は誰の為に使うのでしょうか？

ドタバタ？ラブコメ？色々定まらぬジャンルで突き進みます

基本的に漫画と同じ様にイベントを行います
(注：若干キャラクター達の雰囲気が粉碎しているかもしれません
のでご注意を)

一編トノペレヒヤルトノペレナヘンペレ

俺は今純白の世界に居る

単に純白と書いているが、事細かに詮うとなると

何なし

景
も
な
し

百十
年
記
念
文

三九無し

そんな世界

「うるせーんだから……」

そして何で俺はこんなありえない世界で冷静で居るのかというと

ぶっちゃけ、ライトノベルやゲームなじが好きでトリップとか異世界とかの小説を書いていたからなのである！

まあどれも恥ずかしすぎて誰にも言つていなかな・・・

そんな風に考へていると音の無いはずの世界に音が響いた

カツンカツン・・・

俺は首のする背後へ振り向く、すると

そこには美人なお姉さんが「あらへ歩いて来ていた

そして、俺の目の前まで来ると

「申しわけありません！！！」

思いいつきつ十下座がましてくれました・・・

「は？」

もちろんこんな綺麗な人に謝れるような事をされた記憶は無い

「いや・・・ちょっとよくわからないんですが？」

それから一向に謝り続ける彼女をなんとか冷静にさせて話を聞く

「つまり・・・貴方が槍を振りまわしていたらすば抜けて下界の俺の頭にサクッと刺さつたと・・・」

「はい・・・」

見事に落ち込んでいらっしゃる・・・

しかしそんなカオスな死にかたしたのか俺・・・

「それで、私のミスとこいつ」と上役から貴方を転生せんよつて？」
と・・・

「転生って普通に輪廻の理論じゃなくて？」

もつともな事を聞いてみますよ。」

「はい、一応下つ端とはいえ神が殺してしまったので輪廻から外れてしまつたんです・・・」

といつもなくすまなそうな空気が一気に膨れ上がる・・・

「はあ・・・つまつ何処に転生するとへ・」

「それは貴方の自由です」

ん?自由?

「とこいつとへ」

もちろんわからぬので聞くよ。」

「つまり別世界、異世界と言えばこいつしか

異世界・・・

「それって・・・まさか漫画とかの世界つて可能?」

俺は一気に田をキラキラさせて質問をする

「あー、はー一応可能です

「本当に…本当にですか？…マジのマジで…。」

俺はもう興奮が抑えきれませんよ…。

「本当に…ちなみにチートな能力も付けるといひと言われましたから…。」

「マジックか！チートまでもらえるんスカ…！」

「で、急ぎで悪いんですが何処の世界に行きたいですか？」

んー…やつぱり異世界に行くならば…ハーレムは出来れば作りたい…あ、別に作らなくてもいいが…。
あとは魔法が有れば…？

それなら今世と云えば？

「ネギま…！」

ああ最後の思考が声に出てしましました

神様が若干引いてます

「わかりました、転生先はネギまの世界ですね？」

「はー…。」

「ではチートはどうしますか？上役の神からお詫びとして一つ、私からも一つとなりますが？」

なに？！「いつももらえるんスカ！！

それは行幸・・・

「じゃあ・・・一つは魔眼で・・・」

「魔眼・・・ですか・・・？能力は？」

能力・・・能力ねえ・・・

「えーっと・・・じゃあ魔法を解析できたりする感じで（ぶっちゃけ伝伝です）」

「わかりました、それともう一つで追加しますね」

え・・・？何を？

そんな思いを見切ったかのように言う

「全方位視覚可能な能力です・・・ああちなみにオンオフ可能ですので大丈夫ですよ？」

マジックすか・・・それ最強じゃん・・・

「でもあまり強すぎると世界の修正力が働いてしまつので使用しきると一定の冷却時間を作りますね」

いや、それでもマジで最強・・・

「では一いつ皿せどりますか?」

「一つ・・・か・・・

「じゃあ俺と契約してください」

「契約?パクティオーですか?」

YESと英語で言つてわかりましたと返つて来る

「では失礼して」

やつ・・・やわらげ――――――――!

ちなみにファーストキスはレモンの味と言いますが嘘ですね、何とも分からぬいい味がしましたよ!――

まあそんなことは置いておいて・・・

「カードはー!」

そりやはりカードですよ効果ですよ!

何よりも使えるものでないとかなり意味が有りません

と言つても・・・

「カード見ただけじやあ効果湧かんねえよ・・・」

「見せてください」

俺がぼやいてじばりくして神さんが俺に手を出しながら言つた

「わかるん?」

俺は投げ捨てるかのようにカードを渡す

「ふむ・・・」

それを上手くキャッチした神様はカードを凝視して動かなくなつた

「・・・」

「・・・」

沈黙だけが周囲を支配する

「・・・」

「・・・」

・・・十分後・・・

「もしもし？」

「アーティスト」

なんか全然反応が無いのでちょっと声をかけてみると・・・

何とも寝惚けたような……何というか、間抜けな声が返ってきてま
した

「で、どういう効果だつたんですか？」

「いえ、これは・・・」

んー迷つていらつしやる・・・

・・・とにかく行ってください！！！」

「えちよつ號」

それが俺の最後の言葉だった
・・・

1- 誰トハナスリムトハナムトハナレ(後編)

んー上手く描けたしる気がしない・・・

2話（前書き）

時間的に結構進んでいます

「兄さん待つてー」

俺が湖に向かっていると後ろからネギが追いかけて来る

「なんだ、付いてきたのか」

今は全てが凍える冬、特に此処は山奥に近いのでかなり冷える

「お前はまだ魔力運用が微妙なんだから寒いだの」

そう、俺はネギの兄として転生した

どうやら時期的には村襲撃前らしく

「だって、兄さんの魔法がみたいんだもん」

そう、俺は湖に魔法の試し打ちに向かっている

「んな、見て楽しいものでもないだの」・・・

俺が呆れて言つと

「クチンッ！」

可愛いくじゅみをしてくれやがった

「はあ・・・」

仕方が無いので俺は自分が來ていたコートをネギにかぶせる

「……兄さんが凍えちゃうよー。」

いつまえに心配してきやがる

「お前がもう少し魔力運用上達したら俺も凍えないさ」

俺はそつと湖に向かつ

俺が雪を踏みしめる音に続いてネギも俺の足跡をたどって付いて来る

しばらく歩くと水面の凍った湖が目の前に広がる

「真っ白だね、兄さん」

凍った水面の上には雪が降り積りまるで真っ白のキャンバスのようだ

「やうだな……」

俺はそつとネギの方を向く

「バリエース・デフレクシオ」

小さな杖を取りだして防御の魔法をかけてやる

「ありがとう兄さん」

「まあ危ないかもしれないからな」

そいつ言つと俺は湖に向き直り

「おお、大地よ空よ全て焼き尽くされ等しく無に帰せ・・・燃える
天地！」

俺がそいつ言つて杖を前に出すと

ド「オオオオオオオオオオオオオオ！」

赤黒い炎が一気にキャンバスへと向かって行きそのキャンバスをぶ
ち破る

ザアアアアアアアアアアアア

水柱のように上がった水が降り注ぐ

「つづつめたあ！！」

当然の」と俺はその水を全身に浴びた

「こつ、兄さん？！」

ネギは障壁を張つてあるので水は被らない

え？普通の水は障壁を通るんじやないかつて？

魔術式をちょっと変えるだけで防げるのだよ

「あー、いや・・・成功・・・かな?」

すぶぬれになりながら俺は開発した魔法の破壊威力に満足していた
視線の先にはぽっかりと大きな穴がキャンバスに開いて湖の水面が
見えていた

「よし、帰るかネギ!」

俺はネギを抱き上げて軽く地面を蹴る

フワア・・・

俺とネギは一緒に空へとゅうくじと舞い上がる

「うわあ・・・・

地上から20メートル当たりで上昇をやめて村の方へと進んでゆく

「兄さん!森が綺麗だよ!」

ネギが指さす方向を見ると木々が砂糖を振りかけられたかのように
白に染まっていた

「ああ・・・綺麗だな・・・・

「ああそうだよスタン爺」

「うわー厄介なのが居た・・・

「アルジェやはり先ほどの爆音は貴様か！」

「ネギを抱えたまま俺は喫茶店に来た

「姉さん居るかー？」

「もう少し迷惑というものを考えるー。」

ああ・・・始まりました・・・スタン爺のお説教

俺はネギを下ろして姉さんのところに行くよついに言ってスタン爺の話をのりのりと聞いていた

カロンカロン

スタン爺のお説教が終わり帰路に付く時にふと何を思ったのかネギが質問をしてきた

「ねえ、お父さんってどんな人だったの？」

「そうねー、貴方のお父さんはね・・・とっても有名な英雄・・・スーパー・マンみたいな人だったのよ」

「スーパー・マン?」

「そりよ、ピンチになつたら何処からともなく現れて必ず助けてくれるの」

「へー、スーパー・マンかっこいいなあ」

「じゃあネカネお姉ちゃんも助けてもらつたことがあるの?」

「フフフ、それは秘密よ」

「じゃが、奴は死んだ。散々無茶やつた挙句にお前と兄さんをほつたらかしてな・・・馬鹿なやつじやよ・・・」

「スタン爺・・・そんな方に方は無いだらつ・・・」

「ねえ・・・死んだつて?」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「もう会えなこつじビー ター」とお父をさぞいか遠くへ引つ越しやつたの?』

「・・・やうね・・・遠い遠い國へ行つてしまつたの・・・『死んだ』どこかのやうにいつよ・・・」

「じやあやじやあや、もし僕がピソチになつたらお父をさほめてくれるの?」

「う・・・うん・・・うね・・・」

「はあ・・・あなたバカねー死んだ人には一度と会えないのよ。サ

ウザントマスターの子供なのにそんなこともわからないのかしら？」

「やあ、アーニヤ」

「アーニャちゃん、おめでたま

「アルジェントさんとネカネさんこんにちは！」

「そ・・・そんなこと無いもん！」

おや？ ネギ？

「お父さんは来てくれるもん！」

あなた本当にバカね！『死ぬ』のイミわかってないんでしょう？

「ほらほら、一人とも喧嘩はダメよ？」

見かねたネガネ姉さんが「人を止める

「そりゃ、今日はそんな事無いに来たんじゃなかつたわ……」

卷之三

ハイコレ、あなたにあげるわネギ」

「されば、

「初心者用の練習杖、あんたも来年から学校に来るんでしょ？生きてた頃のお父さん見たくなりたかったら、ちょっとは練習しておい

たら？

そつとアーニャは走って行った

「よかつたなネギ、これでお前も魔法の練習が出来るわけだ」

じっと杖を見つめるネギに声をかける

「うそ・・・」

しかしネギは何かを考えてこむようだった

2話（後書き）

「うー、ほぼ原作どおりですね～～

此処からどうぞ・・・

3話（前書き）

初の戦闘シーン？

ネギがアーニャから杖をもらひてから数日後・・・

「まつたぐ、ナギの奴には苦労かけられっぱなしじゃったわい！あいつをえいなけりやワシもこの村も、もちつと平和じゅつたものを・・・」

「スタンさん飲みすぎじゃないかい？」

マスターの忠告も聞かずにスタン爺は酒を煽り続ける

「もう・・・スタンさんったらまた・・・」

「ねえ、お父さんは悪い人だったの？」

そんなネギの素朴な質問にビビリしたえるか迷つていると・・・

「ああ、悪がきじゅつたわい」

酔っぱらった爺が・・・

「あいつのしでかした騒ぎの後始末が何度あつたか・・・村が巻き込まれた事もあつたしな」

じ・・・爺・・・

「あいつが死んじまつてせいせいしとるわい」

最後のその一言を聞いたネギはどこかへと走つて行つてしまつた

「爺・・・その言こ方はねえだろ・・・」

本当は後を追つべきなのだろうが・・・

あこくながら慰めるのは苦手なので先を爺に向ける

「ひつゝ、本当の事じやわい」

「・・・」

そう言われてしまつと会つた事もない俺には何も言へなくなつてしまふ・・・

「練習しなやこよへネギー。」

「うそ」

「元氣にしてるのよネギー」

「じゃあまた一ヶ月後な」

俺とネカネ、アーニャは揃つてバスに乗り魔法学園へと向かう

本当は俺は残つてやりたかったがスタン爺が猛反発して行かざるをえなくなつた

「なに?！」

それから一ヶ月ぶりに立った今、学園に手紙が来た

『ネギが熱をだした、さすがに付きつきりで看病できんのぢやつとの間帰つて来てもらえぬか?』

それを聞いた姉さんは荷物をまとめ始める

そして

「バスの時間は…」

いや、今からバスつて…てかこの時期雪がひどくて無いって…

「姉さん俺も行くからこっちに来て?」

そう言つと俺は学園に有る一番高い塔に登り始める

「ねえアルジエ?何をするの?」

姉さんの質問をスルーして最上階にあるバルコニーに出る

「手を出して」

やつぱり手を出して来る姉さんに自分の手を重ね

「テレポーション」

転移した…

その後ネギのところに付いた姉さんは本氣で泣いてしまって、ネギばかりも皿の反省し一度としないこと誓つことになった

「さうして時は過った……」

運命の時がやつてきた……

「久しぶりね……ネギは元氣にしてるかしら？」

「いつも通りやんけやつてるんじゃないかな？」

休みが取れたので俺と姉さんはネギの様子を見に村に戻ってきた

「ねえ……アルジー……あれ何かしら？」

「ん？」

あれは……

「まづい……』風よ、我が声を風に乗せ我が友の元に声を届けよー。』

『

簡単な風声魔法で村中に警笛を発する

『全員戦闘態勢！悪魔の敵影を視認！全員戦闘態勢！……』

俺の声が村中に広がる、それと同時に家々から杖を持った人たちが
続々と出て来る

「杖よ！」

そう叫ぶとバスのトランクから俺の杖が飛んで来る

「姉さんはネギを探して！」

俺はそう言い悪魔が最初に接触すると思われる地点へと走った

「遅かつたか！」

結構全力で走ったにもかかわらず、すでに戦闘は行われていた

『雷よ！幾重にも重なり敵を薙ぎ払え！雷の槍！』

手に現れた雷で作られている槍を一気に投擲する

それは一瞬にして目標の悪魔を打ち抜いた

「さあ俺が相手だ！」

その一撃で俺の存在に気付いた悪魔たちが大挙して押し寄せて来る

『炎よ！その力は全てを焼き尽くす！煉獄の雨！』

俺のオリジナル魔法が発動すると同時に

上空に赤黒い炎の矢が出現する

『解放！』

叫ぶと同時にその矢は俺に向かってきていた悪魔どもを貫いていく

『グアアアアアアアアアアアアア』

悪魔の断末魔が聞こえる

さて、ネカネ姉さんはネギを見つけられたかな？

ネ力ネ s·id

「はあ・・・はあ・・・」

私は今ネギを探して村の中を走り回っていた

「はあ・・・はあ・・・何処なの?ネギ!」

私が角を曲がると

「ネ力ネ!待て!」

後ろから声がかかりました

「スタンさん!」

「ネギを探しておるのか?」

「ええ、そりなんです・・・」

「たしか奴は釣りに出かけたはずじゃが・・・」

「ネ力ネおねえちゃーん!おじいちゃーん!」

「む・・・」

「」の声は・・・

私たちはその声がする方にかけ出す

「オオオオオオオオン

ガガアアアアアン

先ほど声のした方からすさまじい魔力が弾けている

「この魔力は・・・まさか・・・奴か?」

どうやらスタンさんは魔力の主の見当が付いているようです

「ぬ?! あれは! !」

「いけない! !

角を曲がったその先には上級悪魔とネギ・・・そして上級悪魔は攻撃の為か口を大きく開いている

「ぬううう

「まにあつて! !

私とスタンさんはネギの前に飛び込み

『レジスト! !』

とつたに石化の魔法だとわかつた私たちはレジストをした・・・が・

・

「ぐむ・・・」

「う・・・」

とつもだつたので完璧ではなかつたよつだつた

「うあああーー!」

足に石化を食らつた私は耐えきれずに足が崩れその痛みで氣を失つてしましました・・・

ネ力ネ s·id END

「ぐ・・・ううう・・・」

さすがにこの数は無理だったか？

俺は今大量の悪魔に囲まれてかなーりやばい状況だ

「キシヤシャシャシャシャ」

魔力が死きた俺は立っているのがやっとで杖を杖にしてからつじで立っている

「終わりだーーー！」

悪役が良べ言ひつけを聞きながら俺は死んだ・・・

3話（後書き）

いきなり死にました！

三話目に死にました！

終わりじゃないです！続きます！

あー何で石化じやないかって？作品上の都合です！

2011/09/28 追記

テレポーションはオリジナル魔法です

効果はテレポーテーションと同じです（え？同じだつて？）

まあ略してきな感じなんですが、指摘があつたので始めて使う此処

でオリジナル魔法だと追記しておきます

4話（前書き）

再び

「むう」

俺は再び悩んでいた

「なぜにまた此処なんだ？」

此處は轉生する前に来た神様とあつた場所

そして此处は来てからすでにかなりの時間が過ぎている

おーい なーるーんー!!

叫んでゐるもをなしく響くたに

४८

やはり
転生させてもひたのに死んだのかいになかったのか?

まさか・・・これは嘘?!

「何が嫌なんですか？」

「は？」

俺が叫ぶと同時に背後から声がかけられる

「！」の声は……」

俺は勢い良く振り向く……あるとたんにまづ

「お久しぶり……と、聞えればいいんでしょうか？」

あ、やべ……ちよつと怒ってる？

「お・・・・お久・・・・しぶり・・・・」

俺がそう言つと神様が短く嘆息します

「まつたく、何であなたは死ぬんですか？まだ少ししか生きてない
ところのこと

いや……一応5年ぐらい生きたし……

「一応前世で生きるはずだつた寿命までは生きなればならぬので再び戻つていただきます

「ふええ？！」

「ちょうど周りに人が居なかつたのであなたの肉体も回収しました
し

そつと手を打つとなんか大きな試験管に水漬けになつた転生後の体

はい、裸でした

見てほしくないつす・・・特に・・・ピーなところは（当然だ）

「さて、あなたを再び戻すのはいいのですが・・・何時何処に戻すか・・・が、問題です」

「何時何処・・・か・・・・」

俺は再び悩みます、まあ襲撃後に戻つてもいいかも知れません

たけどそうすると結構厄介なんですよ・・・

学校にて云々か

だとすると？

「じゃあ大戦中に転生つてできます?」

ナギ達に会つてみたいなあ・・・つてのが本音です

「でもあるよ？」

「マジッすかー！」

驚きました、自分で書いておきながら・・・

「じゃあちよっと細かい設定もお願ひでれます?」

「うーーーとおまけですよー」と言つて了承してくれた

「わーーー。」

そう言つた俺は自分の設定を考え始める

出来れば男・・・んー・・・いや、女でもいいかもしない・・・
でも・・・?

「男と女をチャンジ出来る事つてできる?」

「できますよ? 变わるときにちよっとグロテスクになりますが」

笑顔で言われました

「じゃあもう一つ、このカードの能力を教えてください」

そう言つて俺は5年間大事にしまつていたパクティオカードを出す

「使って無かつたんですねか?」

「まあわからない力は使わない主義で・・・」

そういう仕方が無いですね、とまた嘆息された

「ijnのカードの能力は創造です」

「創造・・・?」

「ええ創造、考えた物を作りだす事が出来るんです」

考えた物を・・・作り出す事が・・・でき・・・る?

「チートじゃん!」

「元からあなたの力はほぼすべてチートですよ?」

突つ込まれた・・・

「それと、今あなたの心をちょっとのぞいてみましたが・・・サウザントマスターと会いたいのですか?」

「まあ・・・英雄ですか?」

「ふむ・・・・」

神様が長考に入られました!

なんて思つてゐると・・・

「わかりました、さすがに未来を見せてはいけないのでなるべく女でいてくださいね?」

「わかりました」

「ああ後、女と男両方の時女なら女の一般常識、男なら男の一般常識が浮き上るのでそれなりに性別の羞恥心が有ります、女で男性

のペーなんて思い浮かべない様にして下さいね?その逆もしかりですよ?」

釘を刺されました!

「では行つていらっしゃい

神様の言葉を最後に俺の意識は闇に落ちた

4話（後書き）

結構神様おおぞりっぽですね・・・

とにかく大戦中に飛びます！

5話（前書き）

えちよーーー！

ズン・・・・ズズン！

一体此処は何処だと思いますか？

ド「コオオオオオオオオオオ

お察しの通り戦場！で、」やこします

「なんでこんな所にいいいいいいいいいい

思わず叫んでしました・・・はしたない事を・・・

ただいま現在女の体で戦場のど真ん中に居ます

いやーなんか左から兵士、右からも兵士・・・挟み撃ひこれましたよ？

「死ねええええ！」

わあ・・・斬りかかってきたー

「雷斬り！－！」

私は魔力を手に貯めて雷に変換したもので一気に切り裂きます

「がああああーーー！」

難なく真つ一つになりました

「素顔は・・・不味いな・・・」

そう思つた私は

「アテアツト!」

カードが光り輝き一冊の分厚い本になりました

「お面お面・・・」

俺がそう考えていると

「・・・」

狐のお面が・・・出てきました・・・

とりあえずそれを顔にかぶせて・・・

『闇の指輪』

そう言つと本当に黒い指輪が！しかも設定も考えていたのでそれも付いているハズ！

『闇よ・・・在れ！――』

指輪をした手に魔力を込めて振ると黒い狼が大量に出現

『ぐらいつくせ!』

そして私の命令通りに両軍を駆逐し始める

当たりが悲鳴だけになつた時・・・一つのバグが紛れ込んだ

「なんだ、なんだあ」りやあ・・・」

長い杖を肩にかついだ赤毛のバカが来ました

「なんだ、バカですか・・・」

「ちょ！確かに俺は中退だが！」

「それをバカと言わずして誰がバカになるんですか？」

さらば上空からキザツたらしい男が・・・

「なんですか・・・今度は変態ですか・・・？」

「それは言えてるな」

お次は刀を持つた男

「ヘタレ・・・」

「斬岩剣！――！」

ガアアアアアン

「こきなり切りかかつて来るとか何事ですか」

自分が暴言を吐いたのを棚に上げて抗議してみますよ？

「ほらほら詠春女性に失礼ですよ？出会いなり切りかかるとか」

アルビレオがなんとかなだめています

「で、あんたは敵か？味方か？」

单刀直入にナギが聞いてきます、さすがバカ

「敵・・・って言つたらどうします？」

「もうろん瀆す」

「ふむ・・・」

私は態と考えるそぶりをする

「敵ではないですが・・・戦いたいですね・・・あなたと」

私はそう言いながら殺氣と魔力を一気に膨れ上がらせる

「おおおお、餓鬼のくせにすげえ殺氣だな・・・やるか？」

「では、こちから」

私は面を外しつつ左の魔眼を起動

左目から火が噴き出す

「魔眼持ち・・・魔族か?」

「いいえ、人間ですよ?」

私は律儀に返すと魔法を唱える

『集え風よ、集え水よ、大気は集まり水の刃を・・・氷矢!』

一気に貯め無しで百以上の氷の矢を作りだしナギに向かって放つ

「おうおう、すげえなあ!!」

ナギは難なく避け、避け切れない物を杖に魔法を付与して叩きつぶす

『創造 斬鉄剣!』

アーティーファクトを変形させて耳飾りにし、その途中で刀を作りだす

「こきますよ?」

「来い!」

刀を構えて声をかけると威勢よく返して来る

「つふーーー!」

一回の瞬動でナギの背後に回る

「おおお？！」

それでも余裕そうだ

『創造 千華刀』

さらに刀を追加する、しかし今度の刀は

「はあ！？」

横に一気に振る

キイイイイイイイイイ

鉄をこじくるような音と共に刃が分裂して飛んでゆく

「うおおおおおおおおおおおおお？」

それでも軽々と避けて行く

「だつたら・・・『来たれ、虚空の雷、雑ざき払え・・・雷の斧！』

「

手に収束した雷を一気にナギへと振り下す

『来たれ虚空の雷雑ざき払え雷の斧』

ガアアアアアン

魔力と魔力がぶつかり合う

「やるなあ餓鬼のくせにー。」

「餓鬼餓鬼五月蠅いですよ！何より女性に失礼です！」

『『来れ雷精風の精雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐雷の暴風！－！－』

2

同時に放たれた魔法が再びぶつかり合う

「ぬおオオオオオオオオ！」

爆風がすさまじくて私は体を吹き飛ばされ……?

「何やつてるですか・・・」

事は無く、ナギが後ろから抱きとめていました

「何やつてるつて・・・助けたんだが?」

ブチツ

「放せ！！！」

バシン！

「ぐはあー。」

捻りを利かせた平手が難なくナギの顔に入る

「あるふうれらああーー。」

なんのわけのわからぬ声を出しながら地面を転がっていく

「ナギダメですよ？女性はもつと丁寧に扱わないと」

そう言いながらアルビレオと詠春がこちらにやって来る

「いてててて・・・だから飛ばされたとき受け止めたんだうづが・
・」

何事もなかつた・・・とまでは行かずに類をさすりながら戻つて来るナギ

そんでもって何で私はこれ以上戦わないかといつと・・・

「何をしたんですかバカ！」

魔法が使えません・・・

「ああ・・・残念だが魔法はしばらく使えないぜ？」

そう言いながら私を立たせる

「ちよつと珍しい魔法具が手に入つてな、実験をせてもうつた

そいつにながら何やひんみたいな物を出す

「つべー。」

とつわにそれを奪い握りつぶす

「ああああーーーー。」

当然です

「ちよ、それーーー。」

「ふんー。」

「で、どうあるんです?ナギ

「どーいうつた?アル

「どーいうことって・・・彼女の事ですよ、魔法をあなたが封じてしまつたんですねこんな所に放りだしたら・・・よくて戦死、ですかね・・・」

「でしょつね」

ヘタレが肯定しやがりました

「ん・・・?魔法を封じた・・・?」

私は一つの言葉に考える

あれ？此処に来る前に言われなかつたっけ？

服は現地の物をすべて調達するよつと・・・

「ジー・モセカー！」

「どうしました？」

アルビレオが些細な変化に気付く

「やつ・・・」ち見ぬな！――

私は体を隠すために蹲る

「おやおや、こんな所でストリーチラウス……」「じゃあなぜ？」
「魔力で編んだ服なの！魔力がなかつたら維持できなさいに決まつて
いるでしょつ！」

そつ呟ぶと同時に

ガアアアアアアアン

私たちの傍に砲弾が降つて来ました

その衝撃に魔力の封じられた私は意識を暗闇へと落として行つた・・・

5話（後書き）

主人公ピ――――ンチ！

アーティーファクトの設定はちょっとオリジナルです
まあアスナのアーティファクトみたいに本気になつたら一云々的に
思つてもらえれば・・・

6話（前書き）

別視点スタート

アルビレオ S.i.d

帝国と連合が衝突しているそんな中

ちょうど中心あたりに大きな魔力の塊が出現した

「なんだああ？」

ナギもそれに気付いたようですね

「あ、これが山の兵器か……これが山の兵器か……」

「まあどの道やばかったら俺らにお鉢が回つて来るだろ」

そういうながらのんびりとしているナギ

詠春は軍の司令部に属る

「かし姫子ちやんどうすか・・・」

姫子ちゃん・・・此処はあの女の子の事を語つているんでしようね・

「...せめ」

詠春が戻つてきましたよ？

「ナギ、アル上からの命令が来た突如出現した謎の魔力反応を無効化しろ、だと」

謎・・・ですか・・・

「りょーかい、じゃあ行きますか！」

そう言い私たちは前線へと向かつた

「す、いですねえ・・・」

はつやつと悲惨と云つべきまつが正しいのかもしない

何か影のような狼の姿をしたものが両軍の兵士を食らつてこ

「オラオラオラー！」

ナギはいつものようにバカでかい魔力を使ってなぎたおして行く

「まあ私は楽が出来ていいのですが・・・」

そう言いながらその影が現れ続けている先を見つめる

「どうやら、面白い事になつてゐるようですね・・・」

ナギと詠春にまかせて私は楽ですし

「働いてくださいーーアル！」

おつと詠春に言われてしましました・・・

私も働きますか・・・

そして重力球を使って倒して行く

そして後100尋ぐりことじりひで影が全て消え去った

「おや・・・」

驚いて足を止めるといつせらりあの影達の主がこひりを見据えている

流れゆみに長く金色の髪をしてくる・・・

「なんだ、あいつは・・・狐の面など被つて・・・」

詠春は分かつていないうですが・・・

かなり異質な・・・それでいてかなり純度の高い魔力を持っている
ようです・・・

するとナギが先行して近づいていきました

「なんだ、なんだこりやあ・・・」

ナギが話しかけようとしているのかわからないが・・・話しかけて
いる事にしよう・・・

「なんだ、バカですか・・・」

「ちよ！確かに俺は中退だが！」

「それをバカと言わざして誰が馬鹿になるんです？」

あ、思わず悪口癖が・・・

「なんですか・・・今度は変態ですか・・・？」

「う・・・

「それは言えてるな」

詠春が来ると

「へタレ・・・・」

「ふ・・・確かにそうですね

「斬岩剣！――！」

ガアアアアアン

詠春が珍しく怒りましたよ

「いきなり切りかかつて来るとか何事ですか

おやおや、暴言を吐いたのに棚上げですか・・・

「ほらほら詠春女性に失礼ですよ？出会つていきなり切りかかると
か」

そう言つて詠春を注意していると

「で、あんたは敵か？味方か？」

ナギが单刀直入に聞きました

「敵・・・って言つたらどうします？」

予想外の回答に

「もちろん潰す」

躊躇なく答えましたよ

「ふむ・・・」

何かを考えるそぶりをした彼女は・・・

「敵では無いですが・・・戦いたいですね・・・あなたと」

そう言つた瞬間彼女から殺氣と魔力が膨れ上がる

「おおおお、餓鬼のくせにすげえ殺氣だな・・・やるか？」

「では、こちらから」

そう言つと彼女は面を外しました

なんと、幼いながらに美人では無いですか！

「魔眼持ち・・・魔族か？」

「いいえ、人間ですよ？」

しかも魔眼持ち・・・人生の収集してみたいですね、彼女の・・・

そうしてしばらくナギと彼女が戦っているのを眺めていると

「ぬおオオオオオオオオ！」

魔法の衝撃で彼女が飛びました・・・いや、飛ばされました

それを才子が受け止めたのであるが、

「」

何せ二てる二て
・・・・助けたんたか?

放世！！！

ハシシ！

- はくはん !

捻りを利かせた平手が難なくナギの顔に入りました

「あらふれらああああ！」

なんのわけのわからぬ声を出しながら地面を転がっていく

「…ガキ、ダメですか？女性はもう少し丁寧に扱わないと」

そう言いながら私たちは近づいていく

「いててて・・・だから飛ばされたときに受け止めたんだらうが・

・「

何事もなかつた・・・とまでは行かずに頬をさすりながら戻つて来るナギ

「何をしたんですかバカ！」

どうやら彼女は混乱しているようです

「ああ・・・残念だが魔法はしばらく使えないぜ?」

そう言いながらナギが彼女を立たせる

「ちよつと珍しい魔法具が手に入つてな、実験をせてもうつた

そう言いながら魔法具を出す

「つべー..」

それを見せた瞬間にともとまらぬ速さで彼女がそれを奪い破壊した

「ああああー..」

「ちよ、それー..」

「ふんー..」

まあ当然でしょひね・・・

「で、ビリするんです？ナギ」

「ビリヒッた？アル」

「ビリヒッた？彼女の事ですよ、魔法をあなたが封じてしまったんですねこんな所に放りだしたら・・・よくて戦死ですかね・・・」

「でしょ？ね

詠春が赤面せずに珍しく会話に入つて来ましたよ

「ん・・・？魔法を封じた・・・？」

彼女が首をかしげる・・・ビリヒッたんでしょ？

「ツーまさか！」

「どうしました？」

なんか急にうろたえ始めた彼女が気になつて来ます

「やつー！ち見るな！－！」

彼女は体を隠すためか蹲つた

「おやおや、こんな所でストリーチラウウェーブ、じゃあなぜ？」

「魔力で編んだ服なの！魔力がなかつたら維持できないに決まつて
いるでしょ？！」

そつ彼女が叫ぶと同時に

ガアアアアアアン

私たちの傍に砲弾が降つて来ました

私たちはとにかく障壁を張りましたが・・・彼女は・・・

飛んでます・・・

「よつと・・・」

それをナギがロープに来るんでキャッチしました

「氣絶しちまつたな・・・」

まあ当然でしょう

「で、どうあるんですか」

「どうでしょ?仲間に入れるとこのは」

「何を言つているんだアル?」

詠春が聞いてきますが・・・何を考えてこるつて・・・面白いつと
しか思つて無いですよ、何も考えていません

「確かにちよつといかもな、姫子ちゃんの相手をしてもらおつか

そんな風に私とナギの判断で彼女を仲間にする事が決定しました

フフフこれからが楽しみですね・・・

アルビレオ sid END

6話（後書き）

アルの雰囲気ってこんな感じ・・・かな?
キャラ粉碎してないといいなあ・・・

7話（前書き）

「ピックつとはおれにいの事……

「う・・・う・・・？」

意識が覚醒してゆきます・・・

「おひ田覚めたか・・・？」

そして田を開けると田の前には・・・赤毛のバカ・・・元いナギ・・・

「何してるんですか・・・？」

ジト田で見てやる

「いや、起きたんだつたら下に来いよ?」

そう言つてナギは出て行きました

「むう・・・」

そして寝ていたベッドから降りて・・・

「うー」

裸でした・・・二つの可愛い丘が綺麗です・・・

「うー オイー」

自分に自分で突つ込みつつて服をどりしそうかと思案していると

「あーすまん服 「いやああああああああああああああああああ
ぐはあああ」

突然入ってきたナギを思いつきりぶん殴ります

「うればふりふぼおおお」

またもやわけのわからぬ声を出しながら、今度は地面ではなく階段
を転がって行きました

「はあ・・・はあ・・・」

魔力が無い状態だと結構キツイものですね・・・

「アーテアット・・・」

カードは使えるかなーと思つて言つてみると

普通に使いました

『創造 服 女物』

と言つたのですが・・・脳内でどう変換されたのでしょうか?

ゴスロリが出てきました・・・

『創造 服 ワンピース!』

作り直して黒色のワンピースを作る

「あ・・・下着・・・」

失念しました・・・

『創造 服 下着』

下着は年齢相応の物が出てきましたよ?

決して勝負下着的な物は出できませんでした、ええ断じて!

「さて・・・と・・・」

服を着終わった私は部屋を出てみました

「おまえが口ですかね。。。」
「おまえが口だぞ、変態」

「いやおまえの口ですかね。。。」

「せひナギい加減に起きなさい」

部屋から出て階段があつたので降りて行くとアルビレオと先ほど殴り落としたナギが居ました

「朝食、食べますか?」

「在るなら食べます」

そう言つとアルビレオが台所的なところに行つて食器と食べ物をいくつか持つてきました、もちろんその際に転がつていいナギを踏みつけてました

「モグモグ・・・・」

「それで、そろそろあなたの名前をお聞きしたいのですが・・・?」

「モグモグ・・・・ん・・・・」

名前・・・名前・・・

さすがにアルジエは不味いと思つ・・・

たしかアルジエってイタリア語で銀だったよな・・・?

「ギン・・・ギン・インゴット・・・・・・・・」

「ギンさんですか・・・・」

「さん要らない・・・・・」

「そうですか、では私も改めて・・・アルビレオ・イマ、アルヒ呼んでください」

「ん・・・」

「おおイテテテテ・・・・・」

「やつと起きましたかナギ・・・・・」

「んああアル、嬢ちゃん ぐはあー。」

イラつと来たので傍にあったつまようじを投げてみました

またもやイラつと来たので以下略

「ナギ失礼ですよ、お嬢さん アテ」

「ギン・イン・ゴシアが私の名前・・・・・

ナギの頭を踏みつけて言う

「ギン・・・な・・・分かつたから・・・足をじけて・・・・・

さすがに本気で言っているようなのでここで朝食を再び食べる

「モグモグ・・・・

「で、食事中に悪いんだが何であんなところに居たんだ?」

「もぐ・・・」

口の中のものを飲み込んでから・・・

「確かに悪いわね・・・で、あんなところに居た理由だっけ？私もわからないわ、気付いたらそこに居たの」

最後のは嘘だ、出る場所は教えてもらっていた

「気付いたらそこには居た・・・ですか・・・」

「転移ってことか？」

「いえ、転移の魔力は感じられませんでした」

なんか一人が話し始めたので私は食事を再開・・・

「じゃあどうやってあれだけ強くなつた？」

と思つたのですが・・・

「・・・必要に迫られたから」

じつとスプーンに乗つた食べのもを見てから言つ

「必要・・・？子供のあなたにそのような必要が？」

「仕方ない・・・私たちは・・・襲われた・・・人間なのに魔眼を持っていたから・・・」

ちなみにこれも嘘、体よく魔眼を使つてでっちら上じげてみました

「やつか……苦労したんだな……」

そう言つたナギは私の頭を撫でる

「触るな……」

私はその手を叩く

「うおお、悪い……」

あれーなんか物語つてか悲劇の少女が出来上がりつてるー?

「苦労したんですねえ……」

アルなんか泣いてるし……嘘だらうがビ

「とこいつか、あなたに血口紹介してもらつて無い……」

私はナギの方を見て言つ

「あれ? やうだっけ?」

「やう言えればやうですね」

アルにも肯定されたナギは血口紹介を始める

「ナギ・スプリングフィールドだナギでいいぞ

「だから触るなとー」
「だかうひつてまた私の・・・頭を撫でる

再び呟く
「悪じ悪じ、癖でな

どんな癖だどんな

「で、ギンはビリしたい?」

「ビリするひて?」

思わずナギを見つめてしまふ

「戻る所はあるのか?無いなら俺たちと行かないか?」

「戻る所は・・・有るかと聞かれれば無い

「戻る所は・・・無い・・・」

しかし「のまま行くと本当に悲劇の少女が出来上がりつつな・・・

「じゃあどうしますか?」

アルが後押しをして来る

「・・・」

「もうすぐには決められないよな、明日にまで此処を出るからそれまでに決めてくれ」

そう言ったナギとアルは出て行った

「計画通り・・・なのかな・・・」

なぜか自分の考えていた通りに進む・・・しかし、どこか違つといろで私の思う通りに進んでいない気がする・・・

7話（後書き）

世界の修正力を微妙に垣間見た時
・
・
・

別視点
・
・
・

アル si d

「うればふりふほおおお」

悲鳴の後、わけのわからぬ声を出しながら階段を転がり落ちて来る
ナギ

「グッ」

あ、気絶しましたね

「ナギ？」こんな所で寝てはしたないですよ？」

一応声をかけてみるが・・・本当に氣絶してこらゆつだ

「はあ・・・」

その際に起きないナギを数回踏んで・・・

そつ思こつつ台所に行き、食器と食べ物をいくつか持つて戻ります

それなりにお腹が減つているのではないかと思つて聞くと、ちよつと予想外な回答が・・・在るなら・・・ですか

「在るなら食べます」

「朝食、食べますか?」

「心遣をかけておきます

「まひナギこい加減に起きなさい」

おやっ用意しておいた服とは違つ物を畳じてこますね・・・どうじでじょい。

昨日助けた?少女が下りてきた

「これは辛口ですね・・・」

「おはようございます、ベトベイ」

「おはようございます、变态」

「モグモグ・・・」

いや、結構可愛いですね・・・

「それで、そろそろあなたの名前をお聞きしたいのですが・・・?」

「モグモグ・・・ん・・・」

私が名前を聞くと彼女は少し考え始めました

やつして体感時間で一分立った時

「ギン・・・ギン・イン『ロジ』ト・・・・・

「ギンかですか・・・

「そこ煙草なー・・・・

ギン・・・イン『ロジ』ト・・・

ギンはおじや銀でしょ、イン『ロジ』トはイン『ロジ』ト・・・本名じゃなやせうですね

「そりですか、では私も改めて・・・アルビレオ・イマ、アルと呼んでください」

「ん・・・・

彼女が可憐りじへ頷きました、口に口音で無むのですが・・・な

んかものすゞく可愛い気がします・・・

「おおイテテテテ・・・・・」

「やつと起きましたかナギ・・・・」

階段から落ちてきたナギが起きましたね・・・

「んああアル、嬢ちゃん ぐはあー」

あ、再び地面にひれ伏しました

「ナギ・・・失礼ですよ?お嬢さん アテ」

私もつられて言ってしまいました・・・

その際に正確に額のど真ん中につまようじがサクッと刺さりました

意外と痛いですね・・・

「ギン・インゴットが私の名前・・・」

彼女がナギの頭を踏みつけます

といつか彼女は女王気質があるのでしょうか?

ものすゞく様になつてますね

「ギン・・・な・・・分かつたから・・・足をビクテ・・・・」

おや、足を乗せてるだけなのかと思つたらそれなりの力をこめて踏みつけていたようですね

「モグモグ・・・」

「で、食事中に悪いんだがなんであんなところに居たんだ?」

「もぐ・・・」

ナギが聞きますが・・・

「確かに悪いわね・・・で、あんなところに居た理由だけ?私もわからないわ、気付いたらそこに居たの」

「気付いたらそこに居た・・・ですか・・・」

「転移ってことか?」

ナギが予想できる事を言います・・・が・・・

「いえ、転移の魔力は感じられませんでした」

だとすればどうせやつて現れたのでしょう・・・

なんか自分で行つて謎を深めただけのような気がします・・・

「それに、彼女の魔力は急に出現しました・・・転移だつたりもう少しゆっくり感じられるはずです」

「だよなあ・・・」

これ以上この件は詰めても解決しなさそうですね・・・

「じゃあどうやってあれだけ強くなつた?」

確かにそこも疑問です、5歳ぐらいの少女があれだけの力を持つて
いるのか・・・魔力保有量は基本的に元からなので省きますが・・・

「・・・必要に迫られたか」

口に運ぼうとしたスプーンを戻し彼女が言いました

「必要・・・?子供のあなたにそのような必要が?」

まあこれも当然の・・・といふか先ほどと同じ様な質問ですね・・・

「仕方ない・・・私たちは・・・襲われた・・・人間なのに魔眼を
持っていたから・・・」

ふむ、確かに魔眼を人間で宿しているのは普通は居ない、移植やハ
ーフなどの場合はありえるが・・・

「そつか・・・苦労したんだな・・・」

そつとナギはギンの頭を撫で始めました

「触るな!!」

少々叫ぶような感じで彼女がナギの手を叩きました

「うおお、悪い・・・」

「苦労したんですね・・・」

少し心が痛み涙線が・・・

「とこつか、あなたに紹介してもらつて無い・・・」

彼女がナギの方を向いて言います

「あれ? さうだっけ?」

「ナギには乗せますね」

確かに出来てがしらも名乗りませんでしたからね

「ナギ・スプリングフィールドだナギでいいぞ」

そつてナギは再び彼女の頭を撫でる

わつわ触るなどわれたでしょ? ・・・

「だから触るなよ!」

せひ・・・

「悪い悪い、癖でな

あなたにそんな癖無いでしょ? ・・・

「で、ギンはビーフしたい？」

「どうするつて？」

予想外の質問だったのかナギを見つめる彼女

「戻る所はあるのか？無いなら俺たちと行かないか？」

そう、そこが問題だ

彼女は力を持つている、魔眼という力以外にもかなり桁はずれなもの

「戻る所は・・・無い・・・」

もしかしたら彼女の力を悪用しようとする奴が出て来るかもしれない

私たちだったら・・・まあ悪い方向には行かないはずだ・・・

「じゃあどうしますか？」

「・・・」

「そつすぐには決められないよな、明日には此処を出るからそれまでには決めてくれ」

ナギがそつ言い私に田配せをしました

私は田で返事をし共に部屋をでます

途中扉の隙間から見ますが、天井を見つめながら考える彼女は年相応に見えなかつた・・・

8話（後書き）

あれ？なんかアル視点が多い・・・困った・・・

しかも詠春どこいったw

ラカン来る

「ノンノン・・・ノンノン・・・

扉をノックする音がある

「ギン起きましたか?」

アルの声がする・・・

「ん・・・んん・・・・」

私は横たわっている体を起こし扉へと向かいます

「おはよ!です、アル」

「おはよ!ギン、朝食の用意が出来てますから着替えて降りてきて
ください」

そういうとアルは下に降りて行った

私は部屋に戻り

「アベアツト」

イヤリング状態にしてあるアーティーファクトを出します

それを耳につけて・・・

『創造 服 戦闘用計装備』

光が私の体に集まり始め動きやすく、かつ防御性に優れた服が現れる

「・・・胸が・・・苦しい・・・」

病気では無いですよ？締め付けられてるだけです

『創造 服 部分改善』

そりひで言つと胸の圧迫感が取れました

意識的に男の服を作っていたようです

「おはようハサノ」

「おはようナギ」

下に降りるとしてナギが座っていた

そして私がその向いに座ると

「わあわあ食べましょうか」

やつ言いながら詠春とアルが料理の入った食器を持っていました・

ちなみにアルは魔法で食器を浮かせています

『 いただきまや』

全員でハモって・・・

「ガツガツガツガツ……」

『モグモグモグ……』

一人だけかつ込み始めましたよ……

「はしたない……」

私は咀嚼を終え飲み込んでからナギに文句を言います……あ、なんか汁が飛んだ……

「そうですね、ちょっと行儀が悪いですね……」

アルも賛同してくれます

「いふおいへくふあふあいふおじふあんふあないふお

もはや何を言つているのかわかりません

「物を飲み込んでから話せ……」

おお詠春の突っ込み！レアですよ！

「ん、モガモガモガモガ……」「クン」

ん、急いで噛んで飲み込みましたね……

「で、ギン……お前はどうする？」

「ああ、そうですね忘れてました」

驚いたように言つた。本当に忘れてたんですね……アル……

「決めました、貴方達に付いていきます」

そう、私は覚悟を決めました

私が介入することによって変わるであろうこの世界の物語

私が行つてあることを元に戻そうとするであろう世界の修正力と
戦う事

ネギを……未来の自分……いや、居ないかもしれない……で
も助けようとと思う……

私たちは今宿を出て歩いています

別にこの世界には竜とか空飛ぶホーヤララとかがあるんだからそれを使えば・・・と思うんですが・・・荷物を持つ竜しかいません

アル曰く

「移動用のものだと食費が馬鹿にならないんですよ、空飛ぶホーヤララだと燃料が同じようにバカにならないんです、だからダメです」

笑顔で言われました

んー・・・魔法具で何とかしちゃおつかな・・・?

そう思いながらイヤリングに触れるんですが・・・

「ギン、それ使つなよ。」

ナギに見抜かれてます・・・

物を作るという力はばれていませんが・・・強力な魔法具といつ
事はばれています・・・

「わかりましたよー歩けばいいのでしょうかー歩けばー」

もう半分やけです・・・

それから一週間ぐらに立つたでしょうか？

途中別行動をしていたナギの師匠ことゼクトと合流
そらくゼクトに私が極端な魔法しか使えないのが発覚
怒られて魔法を道中教えるということになりました

・・・ゼクト厳しすぎです・・・

そして今夕餉を作つて + 食べています

「んつふつふつこいつか旧世界は日本のなべ料理つてやつか！」

そう言いながらナギは肉を次々と投入して行きます

「こらー！ナギー！何肉を先に入れてるんだよ！」

詠春が騒ぎます、そんなさなかにゼクトがトカゲ肉でもいけるのかと言っていますが全員でスルー

「いいじゃねえか上手いもんから先でよ、ホイホイ」

次々と肉が鍋の中に・・・

「バツバカ！火の通る時間差というものがな！」

「あーうつせーうつせーぞーえーしゅんーー！」

ああなんかカオスです・・・

「フフ・・・詠春知っていますよ？日本では貴方のような者を・・・

鍋将軍！

と呼びならわすそうですね

『ナベ・ショーグン！？』

ゼクトとナギがショック？といつか驚いています

「わかつたよ・・・俺の負けだ・・・今日からお前は鍋将軍だ」

「つむ、好きにやるがよこ全てお前に任せせる」

そんな風に平和に食事が・・・

ズガアアアアアアアアアン

鍋があつたところに大剣が飛んできました

ちなみにすでにゅであがつてている肉はアル、ゼクト、ナギの三名に全て捕食されました

「...」
「...」

「なんじやあのバカは・・・」

「帝国のつて訳じやなさそうだな・・・」

に
・
・
・
肉
・
・
・
鍋
・
・
・

「えーしゅ・・・むおおお?！」

私の視線の先にはひっくり返った鍋を被つた詠春さん・・・

「フフ・・・・フフフフフ・・・・フ・・・・・・・・・・・・・ 食べ物を粗末にするものは・・・」

「私の・・・肉・・・鍋・・・」

「ビートー来ねーのかあ——? 来ねーなら」いつから……

ザンツ

「斬る」

「死ね
・
・
・
」

私と詠春さんは一瞬でラカンに接近

ラカンが持っていた剣は詠春さんがぶつた切りました

「ちよ・・・ちよつたんまー・マジで強いなー! ちよこめたね?」

「ふざけんなー。やる奴なら本領を出せーー！」

「 Bieber でもいいです、私の食事を邪魔するなら死になさい！」

「つへ・・・そーすか・・・じゃあ」つちも・・・裏ワザを・・・」

そう言つた瞬間ラカンが薬のカプセル的な物を投げてきました

ボンボボン

そして煙が出たと思つたら・・・

「つぶーーー！」

あー詠春さんの弱点お色氣ですか・・・

あつ、頭にタヌキの置物落とされて潰れた・・・

「関係ないです・・・！！」

私はアーティーファクトで作りだした刀を一本振りまわしながらラカンを追い詰めていく

「つちよ、あんた誰だ！！」

当然ですね、つい最近仲間になつたばかりです、知らなくて当然です

「誰でしょつ・・・ねつーー！」

体の回転を利用して剣を横に薙ぐ

ゴツ・・・バガアアアアアン

せり出していた岩が斬れました

「オイオイオイ、でたらめじやねーかー！」

「知りませんよ…ええい！ 食べ物の怨み…！」

『創造 奥義 桜』

私がそつと体を桜の花びらが多い始める

「なんだなんだなんだあ？！」

ついに私の体は桜で遮られて見えなくなる

そして桜の花びらが周囲に散つて行く

「ああ？ 何処だ？」

そこには私は居ない

「此處ですよ？」

そつしてラカンの背後にある桜の花びらが急に私になる

「うおおおお！」

「死ねと書つています……『奥義 桜花斬……』」

「気合い防御……」

ギャリリリリリリリ

刀が何かにさえぎられてこする音がする

「本当にでたらめな奴ですね貴方は！！」

「なんだなんだ？俺の事を知つていいのか？」

「知つていいようで知りませんよ！..！」

あらん限りの力で刀を振りぬく

ギィイイイイン

「ん？」

嫌な音がしたと思つて見てみると

「折れてる――――――！」

はい、折れました刀

「くわううう・・・本氣で殺す・・・！」

『創造 殺戮の糸』

そう言つた瞬間深紅のピアノ線が私を取り巻く

「死ねやあああ！」

そうしてそれを魔力で操りラカンへと振るつ

「つふん！！」

だがしかしラカンの拳の風圧によって起動がすり込まれ

「嬢ちゃん強いな・・・だが、細部が甘いぞ？」

「つなーー。」

あつえないとだけに驚嘆してこのと懐に入られていきました

「うはあああーー。」

「うぐー。」

下からのアッパー！

「オラあああーー。」

障壁を無視して貫通して来るとか

バグめ！

9話（後書き）

強すぎな設定でしょうかね？ラカン・・・
詠春のやられ方って今思つとダサイですね・・・

1-0話（前書き）

「カシツええ・・・

ナギ sid

食事中に勝負を仕掛けってきたバカが詠春とギンに攻撃されている

「いやあ・・・何時見てもギンは規格外だな・・・」

大人びた発言が多いせいか、彼女が5、6歳だというのを忘れてしまつ

あれ?といふか・・・彼女の年齢聞いて無くな?

「ナギ?ダメですよ女性に失礼な事を聞いては」

なんでお前は心を読めるかな・・・?

「顔に出やすいんですよ、あなたは・・・」

さいですか・・・

ゴツ・・・バガアアアアン

おお・・・大きな岩が・・・

そう思つていると

「何だ・・・?あれ・・・」

ピンク色の花びらがギンの体を包んで行く・・・

そして花びらが散るとそこにはギンの姿が無かつた

「おーおー、なんだよあれ・・・」

「あの花びらは旧世界は日本の桜とこう植物の花びらですね、しかしあの技・・・魔力を一切感じませんでした・・・どういう原理なのでしょうね・・・」

理論的な事に詳しいアルにすらわからない魔法を使つギン・・・

「お前は・・・誰なんだ・・・」

それでいてなぜか親近感の湧く魔力を持つギン・・・

「お前は・・・」

「つーいけない!..」

アルの声に思考を中断してギンを見る・・・

「つーギン!..」

そこにはアッパーを食いつて空に舞うギンが居た

ギンの張つている障壁はかなり規格外なはずなんだが・・・

それを貫通する奴・・・ジャックと言つたか?

「本当に何者だよ・・・」

そう言いながら俺は瞬動でギンを受け止めて行くべ

「おつ、出たな情報その4 赤毛の魔法使いは弱点無し 特徴、無敵！」

なんか言つているな・・・

「おこ、お前、ひ・・・手出すなよ。」

「言わねずとも」

「馬鹿の相手は馬鹿にさせるのが一番じゃ・・・」

簡易転移でギンをアルに渡してから向かって呟つ

「奇遇だな小僧、俺も南じや無敵と滅法尊の男だ」

「つぐ、おつせん良いのかよ？剣無しで」

「心配すんな、俺はすぐの方が強え」

「つはー！」

「フン・・・」

互いに魔力と殺氣をぶつけ合つ

動いたのは二人とも同時だった

ツゴー！

「ぐおー！」

「つはー！」

物質量的にキツイな・・・

クロスカウンターをお互いに食らって俺は飛ばされる

「つへー！」

だつたら数で！

そう思いながら分身をして襲いかかる

「つおつーたくさん？！忍者かよ！・・・・あーっと・・・・めん
どくせえー！」

ドッ！

奴が手をしたから上に振った瞬間、衝撃波があたり一面を吹き飛ばす

だが俺はそこには居ない・・・

『百重千重と重なりて走れよ稻妻

「大呪文か！」

「千の雷ー！」

『気合い防御！』

つち防がれたか

「まだまだいくぜええ！」

「！」やああああー！」

そつして戦いは延々と続いた

13時間後

「フ・・・フフ・・・やるじゃねえか・・・小僧・・・」

「あんたこそな」

お互い魔力を消耗しきつて動けない状況に・・・

「いや、四対一で挑んでおいてこのざまじやあ俺の完敗か・・・」

「俺は・・・俺に並ぶ人間が増えただけで満足だぜ・・・」

そう言つてゐると詠春が俺を背負つ

「『うてねえ・・・ナギ・スプリングフィールド！リベンジするぞ！必ず決着つけるからなあ！』

「おおーこいつでもこいやあ！筋肉ダルマア・・・戦争やつてるよつきがはれらあな！」

「何やうがつづくヤクトが言つていろが無視！」

「うじてしばらべ詠春に背負つてもうつっていたんだが・・・」

「アル、ギンのやつ平氣か？」

「ええ・・・大きな怪我は無かつたですよ？あれだけのアッパーを食らつたにも関わらずほんま無傷です」

「ふむ・・・」

「もう直撃したように見えたんだがのお・・・」

詠春は氣絶していたので以下略

「まあー無事ならそれでいいんだ！」

「そつそづ、皆健康が一番なのさー」

まあそんな考えはお氣楽なのかもしないが・・・

1-0話（後書き）

詠春出番すべねえ・・・いや別に作者が嫌いってわけでは無いですよ？

なんか・・・出しにくい・・・原作でもあまり活躍して無かつたような・・・

ほかのメンツはバグつぶりとか披露しまくってるのに・・・

此処までの1-0話の細部を修正 2011/09/20

1-1話（前書き）

作者名、本名に戻しました！

ええはい、私です！知っている人も知らない人も居ると思いますが・
・

パクリじゃないですよ？パクリじゃないですよ？

私の作品ですよ？本当に！（言つててなんか嘘に聞こえる・・・）

では1-1話お楽しみください！

ラカンと戦つてから一週間後……

その間に帝国に雇われた傭兵とか傭兵とか……あと傭兵とかと戦
いつつ

一路グレー＝ブリッジへと向かっている

「グレー＝ブリッジってどんなところなんですか？」

「どんなところ……ですか……？」

私の質問にうつと困っていますね……

ふふふ……困れ困れ、考えろ考えろ……いつもセクハラとかさ
れてるお返しだ……

「一言で言えばバカデカイ橋……だな……」

ナギが簡潔に言います、確かにあればそれしか表現が出来ないです
ね……

「で、何でそここむかつてるんです？」

「グレー＝ブリッジ奪還作戦に召集されたんだ」

そうか……でも、奪還作戦の時……ラカン居なかつたっけ？

そんな風に思考していると・・・

「よーーーまたあつたなーーーけつかやくつけよーぜーーー!..」

「バカが出た」

「バカがでましたね」

「バカじやな

「バカだ」

「よつしゃーーやるぜ　　!」

あ、こっちにもバカが居た・・・

崖の上からラカンが登場、全員でバカ宣言したにもかかわらずナギだけがやる氣満々に・・・

「バカはバカに任せますか・・・」

「そうですね」

「そうじやな」

「そうだな」

上からアル、ゼクト、私、詠春といつ順に・・・

ツガアアアアン

おおさつそく木が吹き飛びましたよ・・・

しかし、此処・・・町の近くなんですが・・・平気なんでしょうか?

「ああ・・・何でだうつなん・・・」

「なんで一緒にいるんでしょう?..」

あ、もちろん私はジュースです

あれ? 何で一緒に酒なんて飲んでるんでしょう?

「ハハハハハハハハ! おっさんもつまーーぜ!」

「ガハハハハハハハハ! やつぱつえーなーお前ーー!..」

数時間後・・・町の酒場にて

唯一思考があま・・・まともやつは詠春が同意してくれます

アルはアルで面白そつな事ができたと言わんばかりの顔

ゼクトは・・・なんか船漕いでる・・・

そんなこんなで、わけのわからぬまま、ジャック・ラカンが仲間に
なりました・・・

てか、騒がしいです・・・

ナギだけでもかなり騒がしかった日々が余計に騒がしくなりました・
・

ああ・・・平和に過ぐせる日は来るのでしょうか・・・?

無理でしうね・・・少なくとも麻帆良に行くまでは・・・

さらに時は進み・・・

作戦前夜、私の部屋にナギが訪ねてきました

「なあギン、お前も出るのか？」

何を言つているのでしょうかこの人

「出ぬに決まつてゐるじゃ無いですか・・・」

そいつ言つとナギはちょっと困つた顔をしました

「んー、でもな・・・本当ならお前には出てほしくないんだが・・・

」

本当に困つた顔になり始めてますよ・・・

「それは、人が死ぬからですか？」

おそらくこれが正解でしょう、私は見た目的には5、6歳の少女ですから・・・

精神年齢的には20過ぎですが・・・

「そうだ、お前には出来れば人は殺してほしくない・・・」

まあ子供を心配する大人は普通そう言うでしょうね・・・

平気ですよ？私のこの手はすでに血で汚れています、いまさらさ

此処まで行くと本当に悲劇の少女ですね・・・

「そうか・・・お前が良いなら・・・俺はもう何も言わない・・・」

そう言って出て行こうとしたナギですが・・・

「でもな・・・」

そういう言いながら振り向いて近づいてきます・・・・

「でもな、人を殺すことに慣れてほしくないんだ・・・特にお前はまだ子供だろ?」

そう言いながら私の頭を撫で始める・・・

「そうですね・・・私は・・・まだ子供・・・」

そう、私は子供・・・

「そう、貴方の・・・子供・・・」

その咳きは、はたしてナギに聞こえたのでしょうか？

しばらく頭を撫でていたナギは、作戦に遅れるなよ、と言い残して
行きました

1-1話（後書き）

んー内容が薄くなってる・・・

詠春の影がさらに薄くなつた（ラカンのせいいで）
主人公の作り話がエスカレートしていく・・・

なのに！なのに！内容が薄い！

1-2話（前書き）

詠春が壊れている気がする・・・
全国の詠春好きさん、申しわけない・・・

「ハハハハ！斬艦剣！」

ラカンが笑いながらとてつもなく大きな剣を振るっています・・・

「オラオラー！『雷の暴風』！」

でたらめな魔力でナギが魔法を放ちます

「細かいところをなんとかせい！」

ゼクトが中級魔法で飛竜騎士を撃ち落として行きます

「ええい！障壁など意味は無い！『弐の太刀！』」

あれ？なんか詠春のテンションが・・・

「少しばは防御というものを覚えてください」

アルは敵からの大魔法とかを防いだりしています・・・

私は

『創造 人形』『創造 人形師』

人形を操つて戦っています

「『百の瞳』！」

そう言いながら魔力で編まれた糸をクツと引きます

すると・・・

キラ・・・・ガアアアアアアアアアン！

百体居る人形の目が光つたと思ったたら巡洋艦の真ん中あたりがごつ
そりと消えています

「ん？」

一番弱そうだと判断されたのでしょうか？

飛竜騎士がいっぱい押し寄せてきます

「！」の程度で私を止めようと？『百の殺戮』！

人形を操り、人形の持っている剣で串刺しにしていきます

それはまるでスズメバチを攻撃するミヅバチの「！」とく・・・

「ギン・・・意外とグロイ殺し方をするんだな・・・」

ナギが横に飛んできました

「日常茶飯事でしたが？」

そう言いながら首を傾げつつ指を動かす

ああ・・・悲鳴が聞こえます・・・

「まあ確かにグロイな・・・」

ラカンも来ました

「そんなに言わると本当にグロくなってしまいます・・・」

「これでも抑えてる方です・・・本氣を出せば敵の四肢を切り刻んで・・・（以下グロイので略）

「やめろ・・・それはやめてくれ・・・」

ナギが本気で言っています・・・

「わかりましたよ・・・」

「そう言いながら人形を消して行く

「じゃあ、変わりに・・・」

そう言って取り出したのは桜色をした刀

「鳴り響け・・・『鏡幻刀』」

キィイイイイイイイイイイイイ

私が刀の名前をいつとその刀はそれにこたえるかのよつて響き始めると

「『桜舞』」

ザアアアアアアアアアアアアア

何処からともなく現れる桜の花びらが私を完全に包み込む

「『霧散』」

そつこいつと桜は散り私も姿を消しています

「おいおい、マジで本気なのか?あいつ・・・

ナギが呆れた声で言っています

「じうやうやうのようですね・・・」

アルが肯定していきます・・・

「加減を知らんのか加減を!」

貴方が言えた事ですか?ラカン

「あの技・・・素晴らしいな・・・」

あれ?詠春さん?きらきらした田でじうじしたんですね?

別に私は桜を使って転移してるだけなんですが・・・

「貴方に言われたくないですね・・・ラカン・・・?」

そう言いながらラカンの背後の桜の花びらに転移してラカンに刀を押しつける

「おおおおー」

さすがに驚いてますね・・・

「味方に刃を向けてどうするのじゃ

ゼクトに呆れられました・・・

「さてと、遊んで無いでもうこいつ行きますか!」

ナギのその一言によつて私たちは散開して行きました

翌日の日の出

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が開発されてて、こんな大戦はもう起きねえそうだ・・・戦を始めたが最後・・・みんなまとめて滅んじまうからだってよ・・・」

ナギが何を思ったのか急に言いだす

「だが、ijjのijの戦は何時終わる？帝都へラスまで攻め滅ぼすつてか？」

いや、戦争なんだから……

「やるきになりやあこの世界にだつて旧世界の科学爆弾以上の大魔法はあるー」こんなこと続けてどうなる？いみねえゼツーまるで……」

「まるで、誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだですか？」

あ、セリフ取りやがった……

アルがナギのセリフを奪つた時

「ある意味そのとおりかもしれないぞ？」

ダンディなオッサンが……

「ガトウ……」

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

少年探偵団って……あんたオッサンじゃん、少年タカミチだけだぞ……

ん？ああ、何時ガトウが仲間になつたか？んー私が寝ているとき知らずと仲間になつていたようです……

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいり……
秘密結社『完全なる世界』だ」

完全なる世界……コズモエンテレケイア……フォイトやデュナ
ミスがいる組織ですね

そして私たちはガトウに連れられて本国首都へと向かった

1-2話（後書き）

次回はもしかしたら完全なる世界との戦闘・・・？

あくまで予定です

そして時間進行速度が早いとお感じでしょうか・・・
まあ物語の布石なんで結構早足ですすんじゃいますー！

「何時になつたら教えてくれるんだよ、わざわざ本国首都まで来て
る・・・」

「あつてほしい人がいる・・・協力者だ」

「協力者?」

「そうだ」

突然声がした方を振り向くと

「マクギル元老院議員!」

「いや、ワシでは無い・・・主賓はあちらのお方だ・・・ウエスペ
ルタティア王国・・・アリカ王女」

ちらつとアリカ・・・もとい父さんを見て

ちらつとナギ・・・もとい母さんを見ます

おや、ナギ・・・ボーッと見つめでどつしました? 一曰ぼれですか
ね?

まあいいですが・・・

「ワハハハハハハハ、上手い事やりやがつて！こんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「じょけんじやねーよ、お姫様といチャイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたるーが！」

「してねつつの、なにがイチャイチャだ！バカ！」

なー元でんだよ、俺なんか・・・

『よく話しかけるな下衆か！』

だせ？・いや、ありせ良い女だせ、一本芯の通ったな

「グハハハハハハハハソーゆーー！」はまだまだカワイイ餓鬼なんだよ
な！てめーはよ！」

「んっだそりやー意味わかんねえ、触るなつづーのー勝負すつか?
てめー!」

「なかが良いですね・・・」

「ああ・・・なかよせやつだな・・・」

私と詠春は呆れてジト目で見ています

「しかしよ、ワスペルタティアの王女って事はアレか?例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ?」

「いや・・・姫子ちゃんの事は・・・なんか話しへいみたいだつた・・・」

「へえ・・・?」

「アリカ姫・・・か」

アリカ姫・・・ねえ・・・母さんになるのはいつでしょうか・・・?

まあそんな風に呼べる由は来ないと思いますがね・・・

そつ思いながら私はその場を離れました・・・

私に視線を移していたナギに気付かずに・・・

その国の王女は戦争を止めるために調停役となり交渉をした・・・

帝国と連合に板ばさみこされた王国

ウェスペルタティア王国

しかし それは叶わぬ今も戦争は続いている

「要するに、戦争をやりたい奴らが
るんだろ？ まーた『あいつら』か？」

「『完全なる世界』帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイア内部まで、シンパがいるようだ……」

「世界全てが彼らに操られているかのようですが……これは……
思ったより根が深い……」

戦争をやると儲かる組織……

つまり武器商人の組織か またはマフィアか と踏んでいたのだが。
・・・どうも違うらしいです

それでちゅうじ休暇中だった私たちは『完全なる世界』の実態を掴
むために調査を始めました

私は面倒だったのでラカンと一緒にバカansasを楽しみました

ナギは・・・アリカ王女 もと母とトートーといつか・・・アリ
カ王女が一方的に買い物に付き合わせるとこう形で休日を満喫して
いました

「こまま仲良くなつてくれると嬉しいですね……」

私は遠見の魔法で一人を見ている

「ギリギリ・・・かな・・・？」

一応アーティーファクトで見つからない様に偽装はしているが・・・

その後もなんとか見つからずに一人を見ている事ができた

「しかし、本当にあの一人が結婚するのでしょうか・・・」

私は一人部屋で呟く

もちろん答える者は居ない

「もし、一人が結婚しなかつたら・・・私とネギは居ない・・・といひことになるのでしょうか?」

分からぬ、私という者が介入した結果未来がどう動くのか・・・

願わくば同じであるよひこ

私は町に出ていた

「まじどあひーー!」

なんか美味しいそうだつた肉まん的なものを買ってそれを齧る

「・・・美味しい・・・・・」

意外といけたので先ほどのお店に戻つてもう一一個買つ

しかし、さすが首都だ人は多いわなんやらでスリなんかも簡単に仕事が・・・

「おつとお嬢さん、スリばダメだよ?」

懷に忍び込んできた手を掴み注意する

みなりから見て孤児か・・・

私が腕を掴んで見下ろしてみると怖いのか怯えている

「・・・来なさい」

そういうて郊外まで移動する

「さて、貴方学ぶ気はありますか?」

私は何をしているのだろう?

少女に聞くと彼女はコクリと頷く

「わかりました、では貴方をアリアドネへ送ります」

そう言つた瞬間私は

「『テレポーション』」

跳んだ

1-3話（後書き）

「アリシア・ペー···、エリザベス···、エリザベスが入学すれば···。
困った···。

一応学びたこは拓まなこと原作では言つてますが···。
エリザベス···、困ったよ···。

14話（前書き）

遅くなつて申し訳ない・・・

でも宿題とか宿題とか色々と大変だったんですね！

行きついた先は・・・

「貴様！何者だ！」

豪華でとても大きなお部屋でした

「なに、怪しい者で「十分に怪しいわ！」ないのですが・・・」

まあそうでしょうな・・・部屋のど真ん中に急に現れたんですから

声のした方を向くと剣をひらひら向けた女性とスースを。ピシッと着て椅子に座っている女性が居た

「貴方が現アリアドネー総裁ですか？」

私は怯える少女を抱えて話しかける

「ありがとうございます、どういった御用件でしょうか？」

さすが組織をまとめたトップ落ち着いた対応です

「なに、簡単ですよ。この子を入れさせてやつてください
いつも言い抱えている少女に手を向ける

「一応私たちは学ぼうとする者は拒みませんが・・・」

「学費の問題ですか？それとも出身？」

私がそう言つと沈黙が返つて来る

だったら・・・

「学費は私が持ります、出身は孤児ですが・・・私の家族としましょうか」

そう言い少女と向き合つ

「いい？今日からあなたはフィル・インゴットよ？」

少女にセーフティピンで愛くいくんと頷く

「これで問題は無いかと」

そう言いつつ総裁を見ると

あれ？ため息をついてらつしゃる？

「赤き翼の最速詠唱魔術師が縁者・・・大物ね・・・」

ブツブツ言つてますが・・・何すか？最速詠唱魔術師つて・・・

「いいわ、入学を許可しましょう」

「リリア様！いいのですか！」

「セラス、此処はどこですか？」

「学ぶものを全て受け入れるアリアドネーです」

「なら分かつてゐるわよね？」

短く会話をした後私に向き直る

「入学は許可しますが・・・いかんせんその身なりはなんとかして
ください、あと最低限生活に必要な道具も」

「そうですね・・・分かりました、一時間後に又来ます」

そう言い禮をして

『テレポーション』

また跳んだ

闖入者が来た、まさに闖入者

いや？ 来たといつより・・・現れたと行つた方が良いのだろうか
みなりの整つた5～6歳の少女とそれより少し下くらいの少女
ぶつちやけ彼女にしがみついている少女は・・・言葉を濁さないで
言えば汚い、が第一の印象だつた

「貴様！ 何者だ！」

此処は総裁の部屋、招かれざる客には警戒するのが当たり前

「なに、怪しい者で、十分に怪しいわ！ ないのですが・・・」

彼女の言葉を遮りつつ囁つ

突如部屋に現れた奴を怪しい者と言わばして何と言つて

「貴方が現アリアドネー総裁ですか？」

彼女は怯えて震えている少女を抱え上げた

「そうですが、どういった御用件でしょ？」

総裁は少なからず興味を示したようだ・・・が・・・

「なに、簡単ですよ。この子を入学させちゃってください」

そう言つた彼女は抱えている少女に向ける

「一応私たちは学ぼうとする者は拒みませんが・・・」

「学費の問題ですか？それとも出身？」

総裁はその質問には沈黙で回答した

「学費は私が持ります、出身は孤児ですが・・・私の家族としましょつか」

そう言つた彼女は抱えている少女と向き合ひ

「いい？今日からあなたはフィル・インゴットよ？」

名を付けた

名前をもらつた少女は可愛く「クン」と頷く

「これで問題は無いかと」

そう言いながら再び総裁を見て来る

「赤き翼の最速詠唱魔術師が縁者・・・大物ね・・・」

総裁は何かを考えながら言つている

「いいわ、入学を許可しましょつか」

私には思いもよらない発言だった

「リリア様！いいのですか！」

私が抗議すると

「セラス、此処はどこですか？」

「学ぶものを全て受け入れるアリアードナーです」

「なら分かつてゐるわよね？」

「有無を言わせぬとはこの事でしう・・・

そう言った総裁は彼女に向き直り

「入学は許可しますが・・・いかんせんその身なりはなんとかしてください、あと最低限生活に必要な道具も」

「そうですね・・・分かりました、一時間後又来ます」

彼女はそう言い礼をすると

『テレビーション』

一言で魔法を発動した

「やはり規格外ね・・・」

総裁は頭を抱えてため息をついている

「よかつたのですか？」

「ええいいのよ、学びたい者には祝福をそれがアリアドネーの掲げている言葉よ」

そう言つた総裁は机の引き出しを漁り始める

「セラス？悪いのだけれどどこか空いてる相部屋は無いかしら？」

「えーっと・・・先ほどの少女の年齢だと初等部ですので・・・闪烁・フランドルの部屋が空いています」

私は寮の監督もしているので部屋割は覚えている

「じゃあそこにお願い、あと闪烁嬢にも話して着てもらえるかしら？」

「わかりました」

そう言つた私は総裁室を出た

セラス said END

14話（後書き）

セラスの前の総裁の名前が分からなかつたのでオリジナルで作つてみました！

ちなみにコレットとは「」から辺から絡ませます、ん？何？年齢おかしいって？

んーそこは・・・魔法世界と現実世界の時間の進み方が違うということです手を打つて下さい！

次はオリジナル魔法とオリジナルキャラクターの紹介話にします

わざわざと次話を投稿しやがれ！つと思つ方は催促の感想などくれればきっと真っ赤に燃えて書くと思われます・・・（アハハハ・・・

さて、さすがにボロボロの服のまま買い物に行くのはいかんせん不味い

ならばどうするか？

『創造 服』

作ればいいのです！

簡単にワンピースで良いですかね・・・

色は白、両肩のところに薄いピンク色のリボンの付いたものを出した

「これに・・・って、んー・・・」

さすがにお風呂とか・・・入って無いよね・・・？

此処もオリジナル魔法で行きますか・・・

『創造 魔法 净化』

やつぱりした瞬間フィルの体が光り輝き・・・

本来の美しさを取り戻しました！

いや、可愛いですね・・・きつちやない時もかなり可愛かったんですけど・・・

そりつとした赤毛の髪の毛、くりつとした青の瞳・・・やばい・・・
可愛すぎる・・・

「じゃあこれに着替えて?」

あれ?なんで疑問形なんだ女兒・・・まあいいか

私がそいつは可愛いとクニヒと頷くとワンピースに着替える

やつして、着替え終わったフィルは・・・

「可愛い――――――!」

何この天使マジ天使!

可愛すぎです、このワンピースは正解でした!

読者の皆さんには云わらないかもしだせませんが、この可愛い女・・・
マジ天使です!

あれ?なんか冷めた目線を感じる・・・
・・・仕方が無い程々にしておこうか

「じゃあ行きましょうか」

私はそう言いつつファイルの手を握り買い物へと向かった

ガヤガヤガヤガヤ

アリアドネーのショッピングモールに来てあります

ガヤガヤガヤガヤ

人がとても多いです

今は彼女の私服をもう少し買いこみ、下着も買いその一つの荷物を抱えつつ杖を買いに杖屋に来てます

「すいません、この子にあつた杖ってわかりますか?」

ちょっとお歳の行つたお爺さんがカウンターに居たので声をかける

「ふむ・・・少々お待ちなされ」

お爺さんはファイルを一瞥すると店の奥に引っ込んだ

「ん?」

なんとなく視線を泳がせていると値札が見えた

100万ドリクマ

え・・・

50万ドリクマ

え・・・

150万ドリクマ

ええ・・・

た、高い！何これ！高いよ？！

まあ財布は軽くなつては要るが簡単に買える金額がある、銀行

口座にも結構貯まつてゐる……はず……

さりげなく焦つていると

「お待たせしました」

お爺さんが大きな長い箱を持ってきましたよ？

「いじりはじりでしょ、う？」

そう言いながら開いたその箱の中には……

「す、じ、・、・、

正直それしか言えません

なんて言えばいいんでしょう？

ただただ素晴らしい杖としか言い得ません

杖の上部は炎のような形になつていて、そこからほんのりと火の精
靈を感じる

「こちらは火の精靈が宿ると言われた靈樹から作られた杖でござい
ます」

そう言いながらお爺さんはファイルに杖を渡す……すると……

ツ「ゴーーー！」

「わっぁー！」

杖を握ったファイルから急に風が怒り……

「うひゅよ、燃えてる！燃えてるよー！髪の毛燃えてるーー！」

青い炎がフィルの髪を燃やして……？

ん、さてよ？

ちよつと違和感を感じたので魔眼を起動させて見てみると……

精霊が踊っている……

正確には精霊がファイルの体の周りをグルグルと回っている

これは……？

「やつぱぱつやうか・・・お嬢ちゃんは火の魔法が得意なんじやろうな」

お爺さんがなつとくとこう顔をしてあります

「お代は要りぬ持つて行きなさい」

「いや、ちやんと「持つて行きなさい」

有無を言わぬ顔です……

「で「なうば次杖を買つ時も此処に来なやこ」」

言つ前に先に言われました・・・

「わ、わかりました・・・杖が居る時はひらひらに足を運ばせていた
だきます・・・」

まあたぶんこれからも増えるだろう・・・

「つむ、ゆいじー」

お爺さんはまほひとつとファイルの田線にならひつに膝を曲げて

「いいかいお嬢ちゃん、大事に使つておくれ?」

頭を撫でながら笑顔で言いました

やばい、このお爺さんに惚れそつだ・・・

軽くかっこいいんですけど・・・

そうして杖を買って?もうえて上機嫌なフィルを連れてせりに私たちの買い物は続く

15話（後書き）

んーこれからもこの杖屋で杖を購入して行きます
てか購入になるのかな・・・？

主人公はまだまだアリアドネーに子供を入学させる気満々ですよ?
というか・・・何時になつたらネギの元に行けるんだろう・・・
まだまだ続きます大戦話

この次はオリジナルな魔法や道具などの紹介です

オリジナル魔法・道具（前書き）

オリジナル魔法・道具の説明です

オリジナル魔法・道具

テレポーション

効果：テレポーテーションと同じ
任意の場所に瞬時に移動する
基本的に作中の転移術は行つた事のある場所にしかいけない設定だが、この魔法はアーティファクト産なのでチート要素が入りどこにでも転移が可能となつた

魔法 净化

効果：作中にもあつたように汚いものを綺麗にするという効果
基本的には病気などの悪い物を全て消し去る
なのでガンも治療できるし脳腫瘍も完璧に取り除ける
ただ、魔法の呪いとかは解けないとする

雷斬り

説明：手に魔力を集中させ、それを電機に変換して一気に叩きつけるという技
効果：麻痺が重であるが雷の特性を生かし何でも叩き斬る事が可能
設定では大きな岩ですらも叩き斬ることとする

闇の指輪

説明：オリジナル魔法ではないがオリジナル魔法具として紹介しよう
ぶつちやけた話、伝 伝の魔法具です
効果：自分の意思で操ることのできる影を形にし魔力の量で幾らでも作りだす事が可能

氷矢

呪文：集え風よ、集え水よ、大気は集まり氷の刃を・・・氷矢

説明：大気中有る水分を一気に集めて凍らせて打ちだす魔法

効果：触れた物を凍らせる事が可能

威力的にはサギタ・マギカと同じ威力

斬鉄剣

説明：ルパンに出て来るあの剣

効果：説明要らないでしょ？

鏡幻刀

説明：その刃に映る物は全て幻である

ただの妖刀、超音波のような低周波の音を出す

千華刀

説明：名の通り千の華を咲かす刀

この場合の華とは敵を切った後の血である
一振りで千人を切り刻めるという由来である、実際に千人を一振り
で斬れるかは謎

奥義 桜

説明：アーティーファクトで作りだした大量の桜の花びらで体を包
みそれを当たり一面に散らせる

散った花びらに転移して敵の背後など桜の花びらがある範囲なら何
処にでも転移が可能

桜舞

説明：奥義 桜のキーを簡単にしたもの、効果はまったく同じ

霧散

説明：桜の花びらを散らせるキー

奥義 桜花斬

千華刀で使える奥義
桜の華をまといながら斬りつけるから桜花斬
特に効果は無い

システムキー NO.04

説明：深紅の糸が現れる

基本的に切れない糸、殺傷能力に優れ物を縛ったとしてもそこは簡単に輪切りになる

（注：こここの名前を募集したりしちゃいます）

創造 人形

説明：名の通り人形を大量に作り出す

形的にはマネキン的な感じ、目とかも真っ白で瞳は入っていない
ぶつちやけ想像すると作者にとつては恐怖です

創造 人形師

説明：創造 人形で作った人形を操るためのスキル
これが無いと操れないというペナルティを付けておく

百の瞳

説明：人形師のスキルを発動させているときだけ使用可能
百体居る人形の瞳から光線を出して対象を蒸発させる技

百の殺戮

説明：百の瞳どうよう人形師のスキルが無いと使えない
一体の敵に対して複数の人形で斬りかかるというかなり卑怯な技
敵が一体の場合百体の人形が踊りかかる

説明：頭の中で描いたデザインの服を作りだすというものの
基本的に鎧から何から何まで服装類なら何でもできる

1-6話（前書き）

更新遅くなりました！

更新する度のアクセス数が半端無いなあ・・・と思いつつ総合口を見てみたら・・・2万4千越え・・・

思わず「え？」っと硬直しその後にF5を連打していたのは悪い事でしようか？w

まあ前置きはともかくちょっと更新が滞ってるなと思って急いで書いたもので・・・ちょっと無理感が否めませんが・・・許してやってください

杖を買った？私たちは後は何が必要かと考えた末に小物系を買つことにした

「本当にそんな少なくていいの？」

そして小物屋に入ったのだが、欲しいと言つたものが思つたよりも少なかつたのだ

「これで、いいです・・・」

なんだか・・・遠慮している気がする・・・

「遠慮しなくていいんだよ？」

まあ言つても意味が無いとは思ひが言わねば

「いいんです」

「わかったわ」

私はそう言い会計へと足を運んだ

これから一応離れ離れになる・・・何かつながりが必要・・・なの
かな・・・？

と・・・

『仮契約屋』なる看板が見えました

これで大方の買い物は済んだかなー
などと考えながら商店街を歩いている

などと思つてゐると

「ねえファイル、私と仮契約するのは嫌?」

口をついて出でしまいました

慌ててファイルを見ると

「それで、インゴットさんの家族になれるんですか?」

なんと言つていいか・・・悲しい答えが返つてきた

「はあ・・・仮契約なんかであなたとの絆を作りうかなんて考えた
私がバカだつたわね、契約なんかしなくても貴方は私の家族よ?そ
れは忘れないで、それと私の名前はギンよ」

ファイルに優しく書つとまだ少し思いつめた顔をしているが分かつた
と返事が返つてきた

「じゃあギンさん・・・お母さんと呼んでいいですか?」

「え・・・?」

今何とおっしゃいました?

「わ・・・私をお母さん?」

「はいー。」

何処で間違えたのでしょうか?・・・

「お母さんせやめし・・・・せめてお姉ちゃん・・・・」

「おつまみがいなかわみしがうな顔をしましたが」『また可愛く頷いてくれました

「じゅあ行きましょつか

セツナヒト総裁の部屋にてレポートする

「まつてーお姉ちゃん!」

止められました

「じつしたの? フィル

田線を回じ鳴かして話す体制を取る

「あの・・・・やつぱり仮契約しよ?」

「可愛い・・・首をかしげてくれましたー

そして私とフィルは仮契約をした

総裁の部屋に戻った私とフィルは書類を書いていた

入学書である

「はい、確認しました・・・これでフィルさんは正式にアリアードネーの学生です」

そう言われて喜ぶフィルと未だになつとくが行かないというような顔をしているセレス

「では、私は所用がありますので」これで

そう言つと私は問答無用で・・・

「『テレポーション』」

跳んだ

リリア　s.i.d

はあ・・・

入学書を書いてすぐに行つてしまつたわ・・・

出来ればもう少し話を聞きたかったのだけれど・・・

と、思いつつフィルという新入生を見る

おそらく買い物に出かけた時に購入したのだろう・・・

大きな杖を持つてゐる、そしてその手には一つの指輪がはめられて
いる

黒い宝石と赤い宝石が二つ嵌つてゐる

そしてそれぞの宝石から言いようのない力が感じられる

「本当に規格外な人なのね・・・」

私はこの場に居る全員に聞き取れないレベルの声で呟く

なぜならその指輪から発せられる言ひようのない力は正体が分から

ないのである

氣でもない

魔力でもない

靈力でもない

むしろ本当にこの世に存在する力なのだろうか・・・

そんな風に考えてしまうのも無理は無いのかもしれない

バグキヤラの集団・・・赤き翼・・・

かのジャック・ラカンもバグキヤラと呼ばれているし・・・

リーダー的存在のナギ・スプリングフィールドも保有魔力がバグと言われている

(実は主人公の方が上、だが誰もわからない)

サムライマスターと呼ばれている詠春もかなり規格外と聞いているし

なにより、アルビレオ・イマビゼクト

この両名の素性はよくわかつていない

アルビレオ・イマという人物は一説に重力魔法の発案者・・・とい
う者もいるが・・・それも定かでは無い

ゼクトと呼ばれている少年としか思えない人物はナギの師匠だそうだ

どこからどう見てもナギの方が年上・・・ならば普通は逆なのではないか?

そう思つのも無理はない

故に、ほぼ一言で魔法を使用する彼女もまたバグキャラなのだと彼女は結論付けた

そして、彼女が見込んだこの少女もまたバグなのではないかと一抹の不安を抱いてしまう私が居た

リリア s.i.d END

16話（後書き）

はい！ フィルちゃんと仮契約しました！

ちなみにいつの間にか付けていた指輪については今のところハーローメントで（”。。；A アセアセ。。いやあ。。。本当に更新遅れて申し訳ない！

え？ 今まで作者が何をやっていたのかって。。。？

秋葉の電撃のイベントに行ったり。。。おしゃくもサイン会に当たらなかつた。。。。（おしゃくもサイン会に当たらなかつた。。。）

電撃文庫の次等生を読んだり。。。SAOとAQWのアニメ化＆ゲーム化に興奮したり。。。宿題やつたり宿題やつたり

そんな感じですかね。。。。

ふざけんなと思つた方ゴメンナサイ^_^まあなるべく感覚を空けずに頑張つて更新して行きますよー。次回もこんな作者に飽きずにお待ちして下さい！

17話（前書き）

ちょっと短めです
え？いつも短いって？
まあそれよりも短いといふことで…

「ふう」

する
ファイルをアリアドネーに入学させて逃げるよう日本国首都まで転移

「わいわい……いいが出来なくてるのかな？」

そんなに時間に過ぎてしないはず。
・
・
・

「とりあえず・・・下に降りますか・・・」

その上に施設のレンタルなどJNTOより行く専門で

ドオオオオオオオオ

-
h?
L

なんでしょう。地響きか。

急いで隠りるとか隠すとか居たので。。。

「ガトウ！今の爆発は？」

「いや、わからん・・・だがしかし今あつちには姫様とナギが買い物に」

その言葉を聞いた瞬間

「なんだ・・・だつたら平氣か・・・」

原作通りならナギが敵を潰して証拠を持って帰るハズ・・・

「いや、だつたら平氣つて・・・姫様が巻き込まれてるかもしねないのだぞ!」

「いや、平氣でしょ?バカがついてるし・・・」

それに事実遠見の魔法を展開していく二人とも無事なのはもう見てるし・・・

今だつてナギが敵を潰しに行こうとしたら姫様が止めて一緒に行くと言つてるし

「平氣平氣、じやあ私はひと眠りするわ

そつと手をひらひら振りながら血室へと戻つて行つた

その数時間後
・
・
・

「・・・で」

あー詠春が・・・

「貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れまわした挙げ句！その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！」

本日未明正義の味方を名乗る謎の男が

投影型テレビが何か言っているが全員でスルー

「敵の下部組織を潰しても意味はない！何のために秘密裏に調査していると！大体万が一王女殿下にお怪我でもあつたらどうする気だ！」

詠春が・・・凄い剣幕で怒っています・・・

私ですか？ラカンと一緒に椅子に座つてニヤニヤしますよ

「姫さんノリノリだつたぜー？楽しかったとか言つて」

「嘘をつけっ！」

その後も数秒詠春の説教が続いたが・・・

「詠春さん！」

一人の子供によつて詠春は黙らなければならなかつた

「あの怖い冷血お姫様が今廊下で僕に向って一ヶ口…僕ビックリしちゃって！あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです！確かに笑いましたよね？」

「うむ驚いたのじゃ」

タカミチとゼクトがナギの裏付けを取りました

「な？」

詠春は本当の事だとわかつて黙つてます…しかも後ろでアルが笑つてゐる…

「それにな！」

壊をゴソゴソやり始めるナギ

「ん？」

もつとパンパンやつし始めるナギ

「おつ？あれ？」

目的の物が無いよつですね…

「ナギ？これですか？」

すかさず私は先ほど廊下で拾つた巻物を取りだす

「ああ…！それだそれ！何処に有つた？」

「普通に廊下に落ちていましたよ？」

私はナギに渡して再びラカンの隣に座る

そしてナギを見ていると場を仕切り直す咳をして

「ちゃんと証拠も見つけに来たぜ？」

巻物を開いて証拠を示す

「な・・・それは・・・」

そう、それは完全なる世界の確たる証拠・・・そしてこの戦争を止める事の出来るワンピース

まあ・・・止められないんですけどね・・・

私は冷めてしまった紅茶を飲みつつ・・・さて、いよいよファイトの出番だなーなんて気軽に考えていました・・・

世界の修正力が働き始めているのに気付かずに・・・

17話（後書き）

風邪ひきました！

いやあー頭が痛い＆咳が酷い＆鼻水が・・・etc
な状況です、まあ薬を飲んで若干良くなつてるんですが・・・

まあそんな状態でも別に書くことに支障は無いんでw
んでは次回もお楽しみにw

ふむ、かけたので連続投稿！…といや！

姫様に両頬をひつぱたかれたナギをラカンと一緒に笑った後

「いや、戦争を止めるために議員のところに行つたのだが・・・

「法務官は・・・来られぬ事となつた・・・」

「・・・・・ハ・・・・?」

予想外の言葉に思わずガトウが固まる

「・・・あれから少し考えたのだがね・・・せつかくの勝ち戦だ、
ここにきて・・・慌てて水を差すのもやはりどうかと思つてねえ・・・
・」

「は、はあ・・・」

「いや、その・・・」

俺達の反応が薄いので戸惑つたのか一瞬目をさせら

「私の意見では無い、そう考える者も多いという事だ・・・時期が
悪い、時を待つのだ君たちも無念だらうが手を引いてな・・・
「

んーでもねえマクギル議員・・・よーへ田を見ると・・・完璧に化
けきつて無いですよ?

田がフロイトのまんまで

「まひな！」

「ん？」

「あんた、マクギル議員じゃねえな？ 何もんだ！」

そいつ言った瞬間ナギが議員の頭を燃やす

「ちよ・・・」

ガトウとラカンが固まっています・・・

「ちよ―――――――つ！？ ナギおまつ！ なにやつてんだよ！ 元老院議員の頭いきなりもやしてーお前ー！」

「バーカよく見ろよおつとこ」

「ですねえ・・・」

そいつ言いながら私も臨戦態勢を取る

「よくわかったね、千の呪文の男・・・こんなに簡単に見破られるとは・・・もう少し研究が必要なようだ

ちなみに、本物のマクギル[元老院議員は残念ながらメガロ湾の底だ
よ]

「てめえー！」

瞬間ナギが瞬動で殴りかかるつとしますが・・・

「通しませんよ」

「くらえ」

火をまとった男と水をまとったところが闇に入り

魔法でナギを後退させるか?と思ひきや・・・

「させないよ!『障壁!』」

ナギの両サイドに障壁を張る

「ぬー」

「ぐー」

そのまま障壁に当たつた魔法は一人の男に反射する

「さんきゅーギンー」

ナギはそのままフロイトに殴りかかるつとしますが

「甘いな・・・最速の魔術師、千の呪文の男」

そんな声が聞こえたと思ったたらフロイトの皿の前にダンディなオッサンが現れて

「ふん！」

ナギを殴り飛ばす

そしてそのまま流れるように腰にある剣を抜くと私に投げて来る

「っく！『障壁 曼陀羅』」

私はフェイトが張っている障壁と同じように障壁を張りますが・・・

ザクッ！

「何・・・」

その剣は障壁をすりぬけて私の肩に刺さった

「いこいつええぞ！」

起き上がったナギがガトウとラカンにいい放つ

「つは！だが生身の敵だ！政治家だとガチ勝負できない敵に比べれば

万倍！－！－！

戦いややすいぜ！－！－！」

「つふ・・・」

ラカンが大剣を出すと同時

「わ、わしだ！マクギル議員だ！うむ、反逆者だ！ああ、うむ……確かだ！奴らに暗殺されかけた！は・・・早く救援を頼む！」

赤き翼全員帝国のスパイだつた！軍に連絡を！」

「げ・・・

「やられましたね・・・

私は剣を引き抜いて立ち上がる

『おりああああああああああああああー』

ラカントナギが突撃、私とガトウは後ろから援護をしようとしていますが・・・

「君たちは少しやりすぎたよ、悪いが退場してもらおう」

フェイトが手を上げた瞬間

ゴッ！

「ぐつ

予想していたように建物ごと吹き飛ばしてくれたのですが・・・四人田のおっさんがさらに剣を投げてきてそれが私にクリーンヒット

左肩にも剣をもらいました

「昨日までの英雄呼ばわりが一転！反逆者呼ばわりか……ヌッフ
ツフツツいいねえ人生は波乱万丈でなくっちゃな」

「タカミチ君たちは脱出できたかなあ……？」

やはり歴戦の差といつものでじょうか、ガトウとナギも平然として
います

ん？ 私はどうしてるのかって？

両肩からドクドクと血を流しながらナギに抱えられています

正直に言つて重傷ですよ

「……姫さんがやべえな」

ええ……アリカ姫がやばいですね……

しかし私もやばいのですが……？ 何時までも水に浸かつてたら…
・ 血が…

私の意識は此処で途切れた

1-8話（後書き）

いやー、謎のオッサン來ましたよー！

あーテュナミスじゃないです、完璧な新！オリキャラです
彼の細かい紹介はいつになるやら・・・（、・・・）遠い日
まあフュイト以上始まりの魔法使い以下と思つて下せこ強烈に

わたくして、姫様救出ヘレッツゴー！

そして何時になつたらネギが出て来るんだ・・・おーい！ねぎい！
どじだー！（笑）

19話（前書き）

若干R15な描写があります
グロテスク？なのが苦手な方は控えた方が良いかもしません
まああまり重要な内容は書かない様にしたので・・・
ではお楽しみください

ナギ s.i.d

俺たちは反逆者として軍に追われつつ、最前線を抜けようとしたアリカ王女救出へと向かつた・・・

だが、そこで一つ問題が起つた

「まずいですね・・・」

このメンツの中で一番治癒魔法が得意なアルが渋い顔をする

「そんなにやばいのか?」

アルの視線の先には偽マクギル議員達との一戦以来意識を取り戻さず、両腕を真っ黒に染めたギンがベッドに寝かせられている

「ええ・・・彼女自身が肩で呪いの進行を防いでいるようですが・・・逆にその呪いを向ける先がだんだんと死滅して行っています・・・」

「

つまり、戦った時に喰らった剣が実は魔剣だったようで

さらにその魔剣の効果は推測ではあるが傷つけた者を呪いで殺していくという物だった

「下手すると両腕を切断しなければならないかもしません・・・」

まさにハ方塞がりという状況か・・・

正規の病院なんかに行けば対処法はあるのかもしれないが・・・今俺たちは反逆者として追われている・・・

よつて何にも手が出せぬまま彼女の腕は死んで行つている

「なやんでもしかたねえんじゃねえか?」

ラカンが頭の後ろで手を組んで氣楽に話す

「ああ?仲間が死にそつなんだぞ!これが悩まずにいられるかよ!」

思わずビリシヨウモできない怒りをラカンにぶつける

しかし実際ラカンのいう事は正しい

誰もどうする事も出来ない・・・病院に駆け込んで反逆者として捕まり治療など受けれる保証も無い

「もしかしたら・・・」

そんなことを思ついたかのようにアルが言つ

「もしかしたら、アリカ姫の王家の魔力なら何とかなるかもしだせん」

その呴きには全員が期待をした

そして、どうしようもない今早く姫を助け出して相談しようつとこう

ijとで全員の意見が一致し

一路隠れ家へ向かい、その後すぐに夜の迷宮へと救出しへ行くとい
う案で決まった

ナギ
s.i.d
END

「うへ、うへ！ 一体……」

両腕に激痛が走り再び寝ていたベッドに横になる

自分の居る場所を確認しようと上半身を起こしますが……

「一体……此処は……っ！」

目を開けると知らない天井……埃っぽい木造の天井が私を見つめている

「う……ん……！」

私は両腕に感じる激痛に意識を浮上させてしまふ

「う……？」

そう言いながら私は視線をめぐらして自分の腕を見る・・・

そこには、肩から下が真っ黒になつている自分の腕があつた

「な・・・」これは・・・

思わず私は自分の状況に硬直しますが・・・

「ああ・・・確かにあのオッサンに剣を投げつけられましたね・・・」

状況を思い出して納得する

おやりくこれはあの時喰らつた剣に毒又は呪いがかかつっていたのだ
うつ

そして無意識に取り換えが効く肩から下という生存本能で呪いの進行を防いだのだと

「さて、どうやってこれを治そつか・・・」

てはまったく動かないで顎に手をやる事が出来ず考える人的なポーズが取れませんが、小首を傾げて考える

「どうか、此処はどこなんでしょう?」

改めてベッドの周囲を見るが窓が一つあるだけ・・・

その窓からの景色でも場所の確認は取れません

「まあ本国首都では無いことは確かですが・・・」

痛みで回らない頭で確實な事を口にして確認する

そしてじゅうぶーっとしてみると

ガチャ

扉が開きました

「お、ギン起きたかよかつたぜ」

ナギが様子を見に来たようです

「ナギ此処はどいですか?」

「なんだよ、子供らしく痛んで喰くのかと黙ったぜ」

精神年齢が体よりも上なんです・・・そんなわけ無いじゃ

と考えますが、そんな事彼が知る由もないのに許容します

「かなり痛いですが我慢できます。で、質問に答えてください」

「ああ、此処は俺たちの隠れ家だ」

隠れ家?隠れ家・・・?

ああ・・・オリンポス山近くに有る掘立小屋ですか・・・

「隠れ家・・・ですか、でアリカ王女は救出したのですか?」

隠れ家に寄つたという事はすぐに出るはず・・・いや、もひ救出したかな・・・?んーでもけが人な私を抱えたまま?

いや、出来なくないかも・・・このバグ集団なら・・・

「ああ今から出るつもりだ」

そつ言いながらベッドの傍に有つた椅子に座るナギ

「じゃあさつさと行つてください、戻つてくる」の腕何とかしますから」

そう言いながら両腕を一瞥する

「んーでもなあ心配なんだよなあ・・・」

「たかが餓鬼一人心配で王女を助けるのを済るのですか・・・

ちょっと発破をかけるつもりだったんですが・・・

「餓鬼一人つて・・・一応けが人なんだぞ!そんな奴放つておけるか!しかも餓鬼ならなおさらだ!」

まくしたてるように言いながら私に迫るナギ・・・

いや、近い・・・近いですよ?

「じゃあ怪我して無ければいいんですね？」

そう言つた私は・・・

「『創造 双剣』」

両肩の上に剣を作りだす

あとは重力に従つて落ちて私の腕を肩から斬り落とすだけ・・・

ツガ！

なのですが・・・ナギが素手でつかんで止めました

「ギン・・・今何しようとした？」

目が据わつてます・・・怒つてますね・・・

「何つて、腕を切り落とさうと・・・」

「餓鬼がそんなことするんじゃねえよー」

あーついに切れましたね・・・

「ですが、私の腕が」のままといつ事は貴方達ですら治せないとい
う事です、だつたら切り落とさないと」

平然と言つますが・・・

「餓鬼が平然とそんな事言つんじゃねえよ！」れからな姫さん助けて姫さんの魔力で何とかできないか頼んでみるんだよ！」

あー王族の魔力に頼るって事ですか・・・

「やう・・・ですか・・・」

無関心やうに返事をしますが・・・内心結構あせっています

だつて私はナギとアリカの子供、つまり？

王家の魔力を保有しています！

なんか知らないですけど王家の魔力って反応するんですよね・・・

始めて会った時抑えるのに苦労しました

で、怪我なんかしてるときに魔力を抑えるだなんてそんな拷問・・・

無理です

「じゃあちやつちやと助けて来てください、やうすればやうするだけ私も早く治せますから」

私はそり言つて再びベッドに横になる

「やうやう、子供は素直にしてればいいんだよ」

そつ言つとナギは私の頭を一撫ですると部屋を出て行つた

さて、ナギ達が出たのを確認したら腕治しますか・・・

気楽に考えつつもちゃんと行かないかな と考えながらベッドに横になっていた

19話（後書き）

さて、次回はギンによる両腕の治療です
予定としてはかなーりグロテスクになる予定です（なんでだらつ、
グロイ方が書きやすい・・・）
苦手な人は次も飛ばして下さい、なるべく重要な事は書かない様に
します

薬って凄いですねー特に今の薬つて
昨日の今日でほぼ直りました風邪！
いやあ・・・何年ぶりだろう・・・風邪をひいたのつて・・・
まあ前回書いた通り風邪ひいても書くのに支障は無いんで書きます
がw

20話（前書き）

ちょっとグロイです、耐性が無い方はお控えください

「さて、始めますか・・・」

ナギ達の魔力がかなり遠くまで行つたのを確認して私はベッドから起き上がる

「っく・・・かなり痛いですね・・・」

その割には随分と冷静なんだなあと自分で感心しておへ

「んー・・・魔法でパパッとやるのも良いですが・・・」

そいつ言いながら私は器用に足でドアを開ける

「あんまり魔法に頼るのもねえ・・・」

向つ先は台所

「『開け』」

言霊を使って冷蔵庫のドアを開ける

「えーっと・・・血止め血止め・・・」

そう言いながら魔力で中を探すが・・・

「無い・・・」

無かつたです

「じゃあ薬庫かな?」

びつやひこの隠れ家はナギ達が修行していた初期のこひ使ってい
よひで・・・

怪我とかしたら時用の為に薬がいっぱいある部屋が存在するんです

ギィイイイ

ちゅつと重やうな扉を開けると中から薬の臭いが漂つて来る

「血止め・・・血止め・・・」

再び魔力で血止めを探すと

「あつたあつた

かなり近くに有りました

それを魔力で浮かせて自分の部屋へと向かう

そしてベッドに座ると

「『創造 双剣』」

先ほどと同じように・・・自分の腕を

ザンツ！

斬る！！

!

予想以上の痛さに思わず叫び声が漏れる

なんとか落ち付けるために息を細かく吐く

卷之三

そしてある程度落ち着いたので・・・

止血薬を傷口に塗りたくっていく

シユウウウウウウ

さすが魔法世界の薬、傷口が一気にふさがっていく

「後は腕を作つてくつかるだけ……だけど……どうしよう。どうやってくつかけよう

さりげなく脂汗が頬を伝う

一
時
間
後

「よし、魔法で生やそつー。」

脳内会議の末決まりました

「『創造 腕 再生』」

そう呟えると

グ・・・グチュ・・・グチャヤア・・・

なんともグロテスクな音を響かせながら腕が肩から生えてきます

「ああ・・・あ・・・・・ああああ・・・・・」

生える時も痛いんですね・・・

これまた予想外の痛みに声が漏れる

「あ・・・ひく・・・・!」

最後とばかりに斬った時と同じぐらいの痛みが私を襲う

「ぐううう～～～～～～～

痛みの名残に身を震わせて目を開けると

きれいにさっぱり、元の腕が復活！

さて、今回の事で得た教訓

自分よりも強い敵が出てきた

という事

原作通りの敵なら基本的に勝てる……と、思つ……

だがしかし、ここで敵に新たなキャラが出てきた

もしかするとこれは世界の修正力といつ奴か？

だとすると厄介だ

強い敵が増えれば増えるほどこの後の戦いは難航する

負けない様にするためには？

どんな攻撃にも耐えうる強靭な肉体を手に入れる？

いやいや、この体でそれは無理……

じゃあ……再生能力……？

「それだ！」

私は新しく作った左腕を露出させる

『『創造 刺青 効果 超再生能力』』

そう言うと淡い光が左腕に集まりだして……

パアアアアアア

散つたと思つとそこには面白い模様をした刺青が刻まれていた

「これで一見落着」

勝手に一見落着した私は切り落とした腕を作つておいた箱に入れて棚の上に置いてベッドに横になつた

「ナギ達帰つてきたらなんて言つんだろ？・・・」

そんな事を考へてゐる間に、私の意識はゆっくりと暗闇へと落ちた

20話（後書き）

さて、斬った後の腕ビリショウか・・・

まあもう決まつてますがw

次回は腕の始末とナギが救出完了して帰つて来るつて感じです

21話（前書き）

月曜に投稿すると書いながらこれ登校しようとしたら・・・
納得いかない！

そう思つて書き直してました・・・

若干納得いかない部分が未だにありますか・・・

どうお楽しみください

「んー・・・」

腕の治療をしてベッドに横になりひと眠りした後、ベッドに腰かけて悩んでいます

「これで確かに再生能力は付いたかもしない・・・でも、戦闘能力が上がっていなければ根本的な解決になつていよいような・・・」

はい、決定的な事に気が付いてしまいました

我ながら今更気付くとか情けない・・・

「んー従者が居るわけでもないから魔法使いとして戦うには前衛が・・・」

まあ魔法剣士的な感じで戦えばいいんでしょうが・・・いかんせん自信が無いです

「ちょっと遊んでみる・・・?いやいや、真面目に考えないと生死にかかる・・・」

そんな風に巡り巡つて初めに戻つたりしてグルグルと考えています

「聖十三騎士団でも作るか?」

アーティーファクトで作る事は可能でしょうか・・・

戦闘技術をどう組み込もうか・・・そこが問題です

「んー・・・」

だとして戦い方をナギ達に教えてもらつても、ほぼバグなので力技系が大半・・・

ラカンなんて氣合いがあれば何でもできる!

的な人ですし・・・

ナギにいたつてはアンチョコ見てる始末

まあ詠春に剣術を教わるのはいいかもしませんが・・・

なんとなく却下!

アル?遊ばれるのが落ちです

ゼクトは魔法関係でお世話になつて吸収できるものは吸収したし・・・

ガトウ?無音拳しか教えくれなさそう・・・

あれ?なんかまともに師匠として仰げる人居なくね?

いまさらながらに気付いた事に我ながらビックリする

「仕方が無い・・・ん場つて想像しますか!」

ということで

頑張ってみます！

「『創造 箱 効果付』 我の想像せし生物を作る』」

大型犬が入れそうな箱を作りそれに魔法をかける（魔法って言えるのかな？）

そしてその箱に

「資源は大切にね？」

某電機会社のキャラクターのセリフをもらいつつ、呪いを受けた腕を箱に入れる

「これで私の腕を元に私が想像するパートナーが・・・」

そう言つていると・・・

ダダダダダダダダダダダダダダ

バンッ！…！

「ヰ（グシャー…）」ふはあ…！」

ナギが突っ込んできたので肘を置いておきました

「つてーなーつて・・・え？」

すつ転んで起き上がったナギが見た物は、私の美しき両腕（誇張しました）

「なんで、腕が・・・？」

本当に混乱しているようですが、笑えますね

「切り落として生やしました」

そう言つて指をさす先は血止めが転がり血がべつとつと付いたベッド

「お前！なんでもまつてなかつたんだ！」

「いや、それは限界だつたからに決まつてるぢやないですか

まあ嘘ですけど・・・

「下手したら死んでましたよ? 私

そつにうとナギは

「すまん、本当に遅れてすまん・・・」

あ~り~り? 落ち込んでこ~り~しゃる・・・

「そんな事より、戻ってきたといつ事は始めるのでしょうか~」

そつにうと私は落ち込んでいるナギと箱を抱いで外へ・・・

「じゃあアリカ様後はようしへお願ひします」

そして・・・

ジャリ

逃げる!

「いひ! 何処へ行くのじゃ!」

後ろからアリカ様の声が聞こえますが・・・

「難しい事分からないんで後よりじくお願ひします」

そつと逃げるよつて転移した

「えりに近い良いでしょつかね・・・」

そつて私は地図を広げる

「えーと此処は・・・」

そう言いながら地図の上に砂を撒く

「『砂よ集まり我のいる場所を示せ』」

すると龍山山脈の頂点のところに砂が集まつた

「え・・・龍山山脈の頂上?」

そうしてあたりを見回すと・・・

確かに頂上でした、といつかあたり一面雲だけ・・・

「ん?」

ふと大きな黒い塊が視界の端に見えたと思いそちらを向くと・・・

「何処の空中城ですか・・・」

ラ ュタ的な感じのお城が浮かんでいました

「あそこを家にできたら最高ですね・・・」

そう言って私は地面を蹴りラ ュタ的な城へと飛んだ

21話（後書き）

ラ ュタ キタ （。 。 ！ ！

つと、デザイン的にはラ ュタを想像してもうって良いかと

自分的に頭の中に描かれているんで納得行く絵が出来たらたぶんじ

Pします

何時になるかまったくわかりませんが・・・

タン

とりあえず庭的な感じのところに降り立つてみた

「誰かいませんか」

一応誰かの所有物だつたら不法侵入になつてしまつので、おそらくギリギリの範囲のところで叫んでみる

「誰かー」

んー誰も居ない?

仕方が無いので魔力で気配を探つたところ・・・

「強い魔力元と弱い魔力元・・・?」

下の方からとてつもなく大きい魔力と城の方からよわよわしい魔力が感じられる

「うりゅりゅー?」

そんな風に魔力を感じて考へているとかなり謎な生物が私の目の前に居た

「うゅ?りゅ?」

丸いモフモフした・・・猫?的な生物は何か封筒みたいなものを咥えていた

「私に読めと?」

言葉が理解できるとは思わなかつたが一応聞いてみる

「りゅー!」

すると激しく頷いた、ちなみにその時封筒がグシャっと言つたが・・・まあ置いておこう

「じゃあ遠慮なく

そうして封筒を受けとり中を見る

『この城に訪れる人が善良なる方である事をまずははじめに祈りたいと思ひ、そして私の勝手な頼みを聞いてくれないだろうか?』

私は昔戦いが嫌いだつた、そして空に行けば誰も私と戦おうとは思わないと思いこの城を作つた

しかし私一人ではさすがに寂しかつた・・・だから偶に下を魔法で覗いていた

あるとき村と村の間での小競り合いがあつた、どちらの力も同じぐらいで五分五分だった

しかし片方の村が非道な事を始めた

忌子を生贊に悪魔を召喚しようとしたのだ

私はその子を助けた、だがその子は全てを拒絶するようになり力が制御出来なくなつた

私はこの子を救うために封印を施した、だが子の城に籠つてからめつたに魔法を使わなかつたために魔力の込め方を間違えてしまつた

我ながら情けないとと思う

そしてその子はこの城の地下で眠つている

もし、この手紙を読んでいる貴方が魔力運用に長けているならその子を救つてやつてはくれないか？

もちろん私の身勝手な頼みだ、変わりにこの城を上げようと思つ

好きに使つてくれてかまわない

最後に、この頼みを聞いてくれるなら私に貴方の顔を見せてはくれないか？』

手紙はそう書いてあつた

魔力制御が出来ない子供が地下に封印されているといふことだらう

魔力制御？簡単だ、それでこの美しい城が手に入るなら万々歳だ

「ねえ君?」主人様のところに連れて行ってくれるかしら?」

私が封筒を持って来た生物に聞くと再び激しく頷くと城の中に入つて行つた

しばらく豪華過ぎず飽きない感じのデザインの廊下を上へ上へと登つていく

「りゅーりゅーーーーーーーー」

そして大きな一つの両開きの木の扉の前で謎の生物が撥ねる

「此處?」

扉の前に達生物に聞くと頷きながら撥ねる

私は苦笑しながら扉を押し開いた

ギィイイイイイイイイ

扉は重苦しい音を立ててゆっくりと奥へ開いていく

部屋の中も廊下と同じで飽きない感じのデザインだった

ただ驚く事は部屋の壁の内一つが本で埋まっていた事だらうか・・・

視線をめぐらすと天蓋付きのベッドがあつた

老人が一人横になつている

私がそのベッドの横に行くと

『貴方が私の頼みを聞いて下さるのですか?』

おそれく喋る事も出来ないぐらに弱つているのだろう

「ええ、多少自信がありますので」

私はベッドに居る老人の手を握り魔力を流してみる

しかし

『私に魔力を流しても助かりませんよ?』

明らかに魔力不足な老人はそう答えた

その答えの通り流した魔力は老人には入らず空中に霧散して行った

『私が使った封印の術の副作用です、死なない程度にジワリジワリと魔力が霧散して行くのです』

老人がそう答える

『ああ・・・これでやっと胸のつかえが取れました、どうかあの子を助けてやってください』

そう言うと老人の存在がだんだんと薄くなつて行く

「任せました、安心してお眠りください」

私は数秒黙祷してから老人の体を抱き上げる

そして来た道を再び通り庭に出る

私は一人の子供の為に努力した彼を弔わずに此の城と共に埋まるまでも重いが如き此處に埋めることとした

さて、次は引き受けた仕事をこなしてこの城の永住権を頂こう
墓を完璧に整えて手を合わせた私は、城の地下へと足を向けた

22話（後書き）

某ゲームの某キャラに似てますが……デザイン的には同じです
(あえて何のゲームかはいいませんが)

内容通り浮遊城を居城とします
まあ仕事が成功したら……ですが……

23話（前書き）

次の話の布石何で超短いです、『めんなさい

カツンカツンカツン

石畳の廊下を歩く音が響く

薄暗い地下の通路には謎の生物が結構いた

なんか動きが某アニメの黒いウニ的な感じなのだが・・・

カツンカツン

カサカサカサカサ

さりげなく怖いよ?

私は気配を探りながら強い魔力がある部屋へと向かっている

「……ですか……」

大きな石の扉、両側には消える事の無い魔力で維持されている炎が
ともつている

「失礼して……」

ギギギギギギギ

先ほどの扉よりも重い扉を開けて行く

「わっふ」

少し隙間が開いただけでとてつもない量の魔力があふれ出てきた

「ぬ・・・くうううう」

仕方が無いので魔力無効化の力を表にして扉を開けて行く

「んつと・・・」

人が通れる程度に開いた扉から入り中を確認する

中央にベッドそしてそこに少女が横たわっている

額と両腕あと両足に魔法陣が刻まれていてそれが魔力を抑え込んでいる

幾ら忍子といえどこの魔力量は・・・

ナギ以上の魔力保有量だ、むしろ生産に器が追いつかないで漏れ出している

「『創造 腕輪 効果 魔力消費』」

まずはこれで試してみよう

簡単に作った腕輪だがまあなんとかなるのではと思ったのだが・・・

ピキ・・・パキヤアアアアアン

魔力を受けすぎて一気に碎けた

「え――――」

消費が追いつかないとかどんな量の魔力だよ・・・

もしかしてもしかするとこれは本人の意志で抑えないとダメな感じか?

私は少女を起こさうと試みるが・・・

・・・ダメだった

何をしても起きない、とか起きたくないという感じだ

「んー・・・手ごわいなあ・・・」

私はそう思って手紙をもつて一度見る

全てを拒絶するよう

この一文がこの結果・・・なのだから

「とこいつ事は過去に、特にこの生贊とこいつがヒントのようね
・・・

そいつ言って私は少女の額に自分の額を合わせ

『『レーベティング』』

自作の魔法で彼女の記憶を覗く事にした

23話（後書き）

さあ、次もつと面白くせえへんと・・・（〃。
。・；A アセアセ・

24話（前書き）

悲しい物語です

少女は生まれながらに忌嫌われる存在だった

少女はその生まれにより全てに拒絶される存在だった

子供は親を選べない

少女は親の身勝手な恋によつて生まれてしまった

「帰れー化け物ー帰れー」

村の子供たちが一人の少女を苛めている

私は上空から精神体のような形で見ている

石を投げられていた少女は泣きながらどこかへと走つて行った

「お母さん、どうして私は化け物って呼ばれるの？」

銀色の髪をして深紅のような瞳の少女はその瞳で母を見つめて聞く

母と呼ばれた女性は苦笑いをし

「彼らはね、外見だけで全てを決めてしまう愚かな人たちなのよ

母親はやつらうと少女の頭を撫でる

しかし少女の唯一の理解者も消えてしまつ

夜

「なんですか！貴方達は！」

どうやら手紙にあった生贊に少女をつたために村人が押し寄せたようだ

「忌子を渡せ！」

「つー誰が貴方達の身勝手な小競り合いで娘を渡すもんですか！」

母親はそう叫びクワで村人に襲いかかる

数人を倒す事ができたが数の暴力には勝てない

すぐに殺されてしまった

「つけ、忌子の親がやつと本性表しやがった」

乱暴に母親の体を投げ捨てた村人たちは少女がまだ眠っているのを良い事に拘束して村へと運んで行つた

『…………』

聞いた事の無い呪文を唱える村人たち

広場に書かれた魔法陣の中心に少女は寝かされている

『…………』

身勝手な村人たちは呪文を唱える、悪魔を召喚するであろうと信じた呪文を

「う・・・ぐつ！ああああ」

少女が弱弱しく呻き始める

村人は術が最終段階に入ったとみて呪文を唱えるのをやめた

「ああ・・・ああああ・・・ああああああああああ

だが、その呪文は悪魔を召喚するものでは無く、魔力を解き放つものだった

嵐のような魔力の渦が広場を襲う

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ

無理やり魔力を解放された少女は悲鳴を上げている

どれぐらい経つただろうか？

その村の村人たちは魔力に当てられて全て死んだ

魔法に普段接しない彼らは魔力の体制が無いためどんどん弱つて死んで行つた

「これはひどいな・・・」

すると上空から一人の青年が降り立つた

おそらくこれが先ほどの老人だろう

「これは並大抵の封印ではダメだな・・・」

そう言つた青年は彼女に近づき額と両手両足に魔法陣を刻む

「我の魔力を使い彼女を救いたまえ」

そう言つと五つの魔法陣があわく光一時的に魔力の放出が止まつた

それを確認した青年は少女を抱え空へと飛んだ

城では青年が悩んでいた

魔力の放出を止めては見たが少女が起きないのだ

もしや自分の魔法が少女の意識まで封印してしまったのではないか

そうブツブツ行っていた少年は彼女の額に手を置いて動かなくなる

じぱりくそのまま微動だにしなかつた青年は急に脂汗をかいて後ずさつた

「まさか・・・これほどまで全てを拒絶しているとは・・・」

どうやら彼女は青年が脂汗をかいて狼狽するほど全てを拒絶しているようだ

化け物と呼び拒絶する村の子供

母を傷つけ殺した村人

唯一愛してくれた者が消えた絶望

自分が自分を否定する虚無感

これらが彼女の意識が戻らない原因なのではないかと紙に書いていく
だが、意識は戻っている

事実私は少女の記憶を見ているのに青年が出て来るのはおかしい
もしや？と重い私は精神の接続を切った

24話（後書き）

上手く物語として仕上がるといふでしょ？
結構悲劇系の物語を書くのは得意？（得意と言つて良いものか…）
なのですが…。
やはり作品の中に物語を一つ入れるのは大変です

まあ楽しんで読んでいただけたら幸いです^_^

彼女の記憶から精神を切った私は少女に話しかける

「貴方の全てを奪つた存在が憎いか？」

私が彼女に問いかけると少女が頷く

やはりそうか

彼女は人、いや魔力の反応が傍に来ると意識が覚醒するのだ

原因？分かりませんよそんなの

「じゃあ貴方はずっと籠つたまま生きるのか？」

普段するような事じゃないから口調が荒々しくなっている気がする

この問いにも頷く

「たとえ自分を受け入れる存在がいるとしてもか？」

この問いには少女は答えない

「私は貴方を受け入れよう、もちろんどうわべだけの事じゃ無い

貴方を愛し貴方の為に貴方を叱りつ

貴方の死んだ母の代わりとは言わぬが精一杯愛そう

それでもダメか?」

少女は迷っているようだ・・・

「では先ほど老人が亡くなつた、それは貴方を助けるために死んだのだ

その老人の願いをむげにするつもりか?

貴方を助けるようにと私に頼んだ老人の最後の願いを

そう言つと少女から若干の反応が返る

「そうだ、貴方を愛した人は母だけでは無いお前を此処に連れてきた老人も愛してくれていた、そして私も貴方を愛そう」

そう言いながら少女の額に触れる

すると彼女の意志が流れ込んで来る

愛されたい、愛してほしい

「だつたら魔力を抑えなさい」

出来ない、分からぬ、どうすればいい

一言一言絞り出すような意志が手を伝わつて私に伝わる

「自分の体から出る魔力を認識しなさい、それは貴方の物です

今は勝手に暴れているだけ、貴方がその魔力に命令すればすぐに收まりますよ？」

私は基本的な事を教える

分かつた

一言で承の意志が流れ込むと同時に

放出されていった魔力がだんだんと収まつっていく

「やつやつ、その調子」

どんどん魔力が抑えられて行く

「もうちょっと、頑張りなさい」

少女の額から両手に手を移して励ます

今まで放出されていた魔力がほぼすべて抑えられた時

「ありがとう」

一瞬誰がしゃべったのかわかりませんでした

でも彼女を見てみると泣きそうな顔でこちらを見ていました

「どういたしまして」

私は満面の笑顔で返しました

さて、彼女の魔力も抑えられたので・・・

そう！晴れてこの城は私の物！

思わず叫びそうになりましたが自重・・・

ちなみに少女の名前はクーミル・アミルだそうです

可愛いですね

そんなこんなで今家事を教えています

料理はちょっと危険なので洗濯や掃除から、ちなみに掃除の練習場
は困りませんでした

だって、城じゅうの部屋が埃だらけ

一体何年放置したんでしょう？

掃除の練習も終わり私が豪華な食事を作った後、一服していのと

キイイイイイイイイイイイイ

指輪が鳴りました

「何? フィル」

指輪を耳に近付けつつ喋る

『今日から長期の休暇に入ったので姉様のところに行きたいです』

あら可愛い・・・つて姉様?

「あの、姉様つてどういう事?」

私が若干焦りながら聞くと

『いえ、コレットに姉様のことを話したらそう呼んだ方が良いと・・

コレットめ・・・どうしてくれよつか・・・

「ふう、仕方ないわねそのままでも良いわよ

じゃあ明日アリアドネーに迎えに行くから総裁の部屋に居なさい、少々総裁に用があるので」

そう言つと擂輪から分かりましたと返事があり通信が切れた

「ふう・・・」

私は残つた紅茶を飲み干そうとカップを手に取る

「あの・・・ギンさん今のは?」

「ん? ああ私の義妹よ、アリアドネーに居るの」

私がそう言つと彼女は何か考えるように俯いてしまった

はどうしたのだろうか?

聞こうと思ったがもう寝ますと言わてしまつたので結局聞けず仕舞いだつた

さて明日はファイルを迎えて行かないと・・・ついでに色々と買い足さないと・・・

そんな風に考えつつ私も眠りに付いた

25話（後書き）

次はファイルを迎えて行く前の話です
たぶんかなり短くなります・・・

誤字・修正点を修正 2011/10/29

26話（前書き）

短いです！」ト承ぐだわい

夜私はアミルの様子が気になりアミルの部屋の前まで来ている

「アミル？ 入りますよ」

一声かけて扉を押して入る

部屋に入ると窓の桟に腰かけて外を眺めているアミルがすぐに田川に入る

「アミル？ 何を悩んでいるの？」

前置きなどで話が長くなるのが嫌いな私は单刀直入に聞く
しばらく考えたような雰囲気を出した後

「私つて恥ずかしくて言つて存在なんですね？」

「ええ、 そうよ」

彼女には自分が何で拒絶されていたかを放してある、 もちろん私は
そんなことは関係がないと伝えたうえで

「じゃあ・・・ 「それはないわよ」 え？」

「どうせ貴方は明日私が迎えに行く子に拒絶されいかなんて考
えてこるんでしょうけど・・・ 」

言いながら彼女へと近づいていき

「私の妹がそんなこと気にすると思つていいのかしら？」

頭を撫でながら言つ

「そう・・・かな・・・?」

今にも泣きそうな顔で見上げて来る

「大丈夫、大丈夫だから安心しなさい・・・」

そう言つて彼女をベッドに寝かせて寝付くまで傍に居た

「そう、大丈夫よアミル・・・私の家族は変わつてゐるのだから・・・」

「

最後に一言やうやう言つと私は自分の部屋へと戻つた

根深くトラウマのように傷が深く残るアミル
そして、フィルと出会うことでの傷はいやされるのでしょうか？

27話（前書き）

今日から修学旅行です、海外なので携帯で投稿する事すら出来ません
又かよ！って思つた方ゴメンナサイ・・・一応もう一話予約投稿してありますので許して下さい

私は今アリアードナー総裁の部屋に居ます

「お久しぶりですね総裁」

そつ言いながらお土産のお茶の葉を渡す

「ええ、本当に久しぶりね・・・今日はどうこつた御用件かしら?」

なんだか呆れていらっしゃる?

「いえ、ファイルに長期休暇になつたということで休暇の間一緒に過ごすために迎えに来たのですが・・・聞いて無いのですか?」

そつ言い

「ええ、確かに・・・」の辺に長期外出の申請書が・・・

えつと・・・なんかグラグラしている書類の山を漁り始めましたが・・・平気なのでしょうか?

「あつたわ!」

そう言つて引つ張り出す、かなり絶妙な力加減なようでグラグラしている書類の山は崩れなかつた

「えーっと、ええ確かに書いてありますね・・・」

総裁が書類を確認していると

「コンコン

「失礼します、ファイル・インゴットが来ております」

そんな声がしたと思つたらファイルとセラスさんが入ってきた

「お姉さま！」

ファイルはそう言つと私に飛びかかつて来る

「久しぶりですねファイル」

飛んできたファイルを優しく抱きとめて地面に下ろす

「元気に勉強してましたか？」

「はいー！」

さてと、じゃあ後は総裁に今後の予定を・・・

「それと今日来たのはもう一つ理由があります

「もう一人？それとも二人？きっとあなたの事だから入学させると
いいのでしょうか？」

予想されていました

「ええ、そうです。しかしあと特殊な子で……いわゆる悪子と呼ばれる存在なのですが……」

「別にアリアドネーはどんな存在でも学ぶ意志があれば入学できますよ。たとえ犯罪者であっても」

そう言いつと軽くウインクして来る

「わかりました、では長期休暇が終わったら連れてきます……」

そして私はお辞儀してファイルの手を掴み転移した

「新しい家族・・・ですか？」

「さあ、ではあなたに新しい家族を紹介しないとね？」

「私は庭に転移した

ツタ・・・

「ええそうよ、それと外見で決めつけはダメよ？相手の本質は中身で決めなさい」

田を見て強い意志を込めて言つた。ファイルは黙つてゴクリと頷く。

「じゃあ行きましょうか」

私はファイルを連れて談話室へと向かつた

「アミル？居るわよね？入るわよ」

一声かけて部屋へ入るとお茶とお菓子を用意しているアミルが、ちらを向く

「お帰りなさい、ギンちゃん……それでその子が？」

「ええ、やつよ、この子が妹のフィル。フィル彼女が新しい家族のアミルよ~。まあ自分で自己紹介して？」

やつ言い私は一歩後ろに下がる

「ファイル・インゴットですヨロシク！」

「ファイルはもう一つと手を出す、つまり握手を求めていいのだ

しかし今までこんな風に接された事が少ないアミルににとっては混乱の極みだったのだろう、私を困惑の目で見る

しかし私が何も言わないので観念したのか

「クーミル・アミルですようじくお願ひします」

「ファイルの手を握り返した

若干ぎくしゃくしているがとりあえずはこれで良いと私は納得し二人を座らせてアミルの用意したお菓子とお茶を楽しんだ

その日の昼食を取った後

「姉さま、魔法を見てほしいのですが・・・

フィルが勉強の成果を見せたいと言つてきました

と云ふことで・・・今庭の一角にある畳置でできた訓練場のような所に居ます

てか、この城かなりの設備が整っています

「では行きます！」

そう言つと魔力を練り呪文を唱えて行く

『契約により我に従え 炎の精靈集い来たりて敵を討て！紅蓮蜂！
アペス・イグニラエラエ』

ズガアアアアアアアアン

真っ赤に燃え盛る大型の蜂が大量に現れ、的に向つて一斉に向つて
飛んでいき・・・大爆発・・・！

「姉さまどうですか！」

目を爛々と輝かせながら見て来るフィルに私は苦笑いしかできなか
つたのは当然の事だろう・・・

27話（後書き）

さあ フィルの魔法初お披露目！

つってもオリジナルでも何でもないです、火のアー・ウェルンクスが
使っていた魔法です
つまり？ アー・ウェルンクス並みの火の使い手と言う事です
これからの成長が楽しみですね^_^

28話（前書き）

今頃オーストラリアです、もうヒートインでしょうね・・・
ではお楽しみください

さて、ただいま居城から遠く離れたグラニクスに来ております
なしてこんな所に？といつ人も居るでしょうが・・・どうも気にな
ったんですね・・・

いや、虫の知らせ的な感じで此処に来ないといけない気がして・・・
とこうことで観光も兼ねてアミルとフィルを連れて商店街を歩いて
います

「ねえねえお姉さまあの高い建物は何ですか？」

この町一番の高い建物を指さしてフィルが言つ

「あれはたしか剣闘士達が戦うための会場よ、見に行つてみる？」

剣闘士とこう言葉に若干の躊躇いを示したが頷く

「アミルも良いかしら？」

「はいー。」

アミルも良いこと云つので行く事にした

『さあー今日の最終試合はここ最近連勝しまくつている奴隸剣闘士の少女リュースフイーだああああああああああああああああああああ！』

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

『対する相手は全身を漆黒のローブで覆つた影使い！御影だああああああああああ！』

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

私たちは今試合を見るために座席に座つてているのですが・・・

あの青髪の少女・・・リュースフイーと言いましたつけ？

何か・・・感じる・・・

そんな風に考えていると試合が始まっていた

『おおーっと！開始早々御影！全身全霊と言わんばかりの影の槍だ！――』

司会が解説している通りものすごい数の影の槍が彼女を襲う

『さすがにこれは防ぎきれないか？・・・いや！防いでいる全て防

い
で
い
る
！
！

何と良く見ると少女の手には水でできた剣が握られている

何処から出したのだろうか・・・

『今度はリュースの反撃だーー！水弾が雨霰の様に降り注ぐーー！』

攻撃を防ぎきつた彼女はどこからともなく出現させる水弾を御影といつ影使いに打ち込んで行く

『これほんと全てが命中している！』これは凄い！凄すぎる！

てかテンション高くね司会の人・・・

そんな風に考へていると・・・

「水ノ聖劍！」 ウォーター エクスカリバー

少女が手を天に向けて突き出している

いや、防ぐも何もあつたもんじやないと思うんですか・・・

御影選手もうボロボロですよ？

彼も降参しないのは奴隸剣闘士に負けるのが嫌なのか・・・それと

も少女に負けるのが嫌なのか・・・

その両方なのか・・・まあ知つたこつぢやないですが・・・

そうして案の定・・・

当然ですね、あの御影とか言う人相手を侮りすぎです

静かに見ていたフィルも戦い方を覚えようとしているのでしょうか？

凝視しています、アミルもなんか憧れ？いえ、違いますね・・・決心したような顔つき・・・が・・・？

二人の変化に若干戸惑いつつも私たちは観客席を離れた

「おい！何でもっと時間を引き延ばさなかつたんだ！」

怒号と共に何かを殴る音が通路の奥から聞こえてきます

「つたぐ、後一分長引かせてれば賭けで勝つてたのによー。」

そう言えりユースの方は奴隸剣闘士でしたね・・・まさか・・・主人が賭けで金儲けをしている？

「すみません何をしてるんですか？」

ファイルとアミルがトイレで居ない事を良い事に話しかける

「ああん？誰だテメー……」

いやあ・・・あかられおにガラの悪そつた男です・・・

肩に刺青、ピアスに指輪、貴様は何処のチャラ男だと聞こたくなつてしましましたが・・・自重自重・・・

「いえ、何やら怒鳴が聞こえたのどうしたのかと・・・」

しつと囁いてみます、しつと

「テメーにやあ関係ねえよ、わざわざ消えな」

まるで虫を追いかけるかのような手のじぐわ

「いえね、何かを殴ったような音が聞こえた物で・・・おかしいですね、そこに倒れてるのは先ほどの剣闘士さんでは？」

男の後ろ、暗がりの中にリュースと言われていた剣闘士が倒れてい

「御主人の言いつけを守れなかつたから御仕置き中だ、お前には関係ねえよ何度も言わせるな消えな」

再び同じじぐわ

「確か奴隸剣闘士と言われてましたね・・・つまるところ一応商品なのでしょう？実は護衛を探していましたんですよ、ちゅうじゆにありますか？」

もつ、営業スマイルも顔負けなスマイルで囁いてやる

「ああ？俺がこいつを売ると思つてんのか？」

「では」わざりこでむりじゅうひへ。

凄む男に小切手を出して、新世界で軽く一生遊んで暮らせるといつ
金額を提示してみる

「ハハ。」

わすがに描ひきますよねえ・・・

「わや、どうでしょひ？今ならこの場での取引が出来ますが？」

あれ一完璧に営業モードはこつけられた？

「し・・・っしかたねえなあ、そんなに頼むんなら売つてやるよ
へつへちゅういもんや、こんなはした金で有能な子を手に入れられる
なんて・・・

おうとうと、自重自重・・・

「では契約成立ですね、奴隸の契約球を渡して下れこ

そつ言いながら手を出して球を受け取る、その際に主従の譲渡を行つ

「確かに確認しました、ではこいつが小切手になります」

カラカラと金額を書いて自分の署名をする

「銀行に行けば「知つてゐるよそんなこと」・・・結構」

あばよ、と言残して彼は去つて行きました

さて、この子の事をどう説明しようかと考えながら、かなり弱つてしまつてゐるリュースを抱いて先ほどの場所へと戻つた・・・

28話（後書き）

新たに増えたリュース、皆さんはもうお分かりですよね？
ファイルに続いてリュースもか！って思った方はこの先の成長を楽し
みにして下さい

分からぬ方もこの後の展開を期待して待つていただけると幸いです

そして、そろそろオリジナル設定第二弾を紹介した方が良いのかな
あ・・・なんて考えてますが・・・どうでしょうか？

欲しがつたら言って下さい、帰つてきたら追加します^_^

謝罪

ネタが出てきません！いえ・・・正確にはわんさか湧いています。

しかし！…

まとめられねえ・・・orz

そんな状況下で、やうにテストが！

右往左往する毎日です

修学旅行の後すぐ元中間つてどう思こます？

鬼畜！つとしか言えません・・・。（ ）・・・。
エーン！…

とこりことでかなり間が開きそつです（今でも開いていますが・・・
）

出来れば今週中に一話ぐらいは投稿したいと思つてますが・・・

あれも！これも！それも！やつも？全てまとめるのはなかなかに大
変です（ = 。 。 ; A アセアセ・・・

長い田であめに見てやつてくださいこへへへ

29話（前書き）

遅くなつて申し訳ないです

スランプ + まとめられないが遭い重なり、さらに別の小説まで書き始める始末・・・

まあ詳細はあとがきで・・・じつはお楽しみくださいこへへへ

未だに氣絶しているリュースをお姫様抱っこしてフィルとアミルを待つ

「姉さままだいま戻りました」

二人が小走りで駆け寄って来る・・・が

「姉さま！何処で拾つて来たんです！」

「拾つて來たつて・・・犬や猫じやないんだから・・・それとこの子はリュースフイーよ、主人に乱暴にされていたから思わず買つてしまつたは・・・」

そつ言いながらリュースの顔を見る

「酷い事・・・ですか・・・」

アミルは自分の過去を思い出したのか俯いてしまった

「でもね？私たちがそんな酷い事があつたなんて忘れさせてしまえばいいのよ？」

両手がふさがつて一人を撫でられないのは口惜しいが・・・

優しい声で言つ

「そ、う・・・です、よね！私たちが、これから楽しい思い出を作つて
あげれば！」

アミルが強い目で私を見つめる

「や、や、その気持ちを大切にしてね？」

二人の決意を確認して私は私たちの家へとゲートを繋げた

所変わつてオステイアでは・・・

「どうする・・・赤き翼・・・なかなかに厄介な集団だぞ・・・」

漆黒のローブに仮面を付けた長身の男が仲間に語りかける

「バカをリーダーにするような集団だ、特に気にする必要も無からうて・・・」

「我々が早々に負けるわけが「この前負けたのは何処のどこつじやつたかな?」「ぬぐッ!..」

赤毛のダンディなオッサンと青毛のダンディなオッサンが話していると身長の低いローブが歩いて来る

「Jの前秘密基地の防衛に失敗したのは何処のどいつじゃったかの・・?」

小さなロープは手を顎に当てて考えるふりをする

「ぐ・・・我々・・・です・・・」

「悔つてはならぬぞ・・・あればもはやバグじや、幾ら世界の創造主が居たとしても奴は人間・・・リライトは効かぬのだ・・・」

『ツハ!』

「教育が大変ですねえ・・・アマテラス」

黒ロープが小さなロープに言つ

「いつも教育し終わる前に壊してしまつのは何処のどいつじゃ・・?
?ああ?」

小さなロープが凄むと黒のロープも黙つてしまつ

「まあ少しばかり頑張るのじゃな・・・奴の夢みた世界の為に、お前たちはそのために作られたのじゃろ?」

そう言つと小さなロープは宮殿の奥へと入つて行つた

ところ戻つて城

「まだ起きないんですか・・・？姉さま」

ファイルが扉を少し開けて覗いて来る

「ええ・・・今日はこのまま坐つとしてお起きましょつか・・・」

私はそう言つてリュースの頭を一撫でして部屋を出た

「あーそつだ！姉さま、アミルが話があるやつですー！」

そう言つと私の手を引いていつもお茶などをしている部屋に連れて行かれる

「アミル！姉さまを連れて來たよー！」

元気よく宣言したファイルはソファーの一つに座つアミルが話し出すのを待つている

「さて、アミル・・・私に話があるらしいけど何かしら？」

私はアミルが座っている向い側のソファに一坐る

「お姉さま・・・私にも魔法を教えてくださいー！」

突然そう言いながら頭を下げる

「うん、教えるのは良いけど・・・急にどうしてかしら?一応もう少ししたらアリアドネーに行つてもううのだけれど・・・それまで待てないの?」

「はい!待てません!今日見た戦いでも私は実感しました、この世界は実力世界なのだと・・・力無い者は頸で使われ力がある者はそれを頸で使う・・・もちろん誰かを頸で使うために教えてほしいわけでは無いです、家族を・・・今は三人だけですが・・・家族を守りたいんです!」

言葉としては弱いかもしねれない・・・でも、その目を見たら誰でも言葉以上の事が分かるだろう・・・

澄み切つた良い目をしている・・・

「わかりました・・・私が此処に残れる時間ができるだけの事を教えましょ、さすがに今日からはもう無理なのでありますからね?」

そう笑いかけながら頭をなでてやる、すると嬉しそうに頷いてくれた

「じゃあ」飯作りましょうか!」

そつ言つて私たちは三人で厨房に向つたのであった・・・

リュースはまだ用覚めません！

一応次の話か次の話で本格的に行こうかと考えています

さて、ただいま作者スランプに入り始めています
いや、ネタは出るんですよ・・・たまごめられねエօሩ
な状況になってしまって・・・書いては消して書いては消してを繰
り返しています

何回書いたのだろうか・・・

ということはこれから若干（若干なのか？）更新が遅れて行きます
まあ正月前までには3~5話ぐらいUPしようと思っています
出来れば今年中に大戦が終わる事を・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8723w/>

魔法先生ネギま！　二つの顔は誰の為？

2011年12月1日20時53分発行